支部だより No.137

日本山岳会京都・滋賀支部　2019年12月15日

山歩会例会

三郎ヶ岳

津田美也子

5月の山歩会例会三郎ヶ岳は、雨中止となり、その時の申込者に、7月の美女山を変更して行うとの案内があり、人数は減ったが8名が参加した。

集合の亀岡駅北口に、老ノ坂を越え長岡より車で向かう。北口側では京都スタジアムの建設が進み、真正面にで～んと構える牛松山、その左奥の三郎ヶ岳のお姿が隠されてしまったのではと、心配していたのだが、ちゃんと望めることができて一安心。

千代川、並河駅間の倒竹による電車遅着組を待ち、2台の車で登山口の小口バス停に向かう。バス停横に車を置かせてもらい、今日は小口からの往復。

時は7月、真夏に近いので、休憩もたっぷりと、ゆっくりゆっくり進む。昨年の台風禍もそうなく、これも一安心。そんなわけでそうしんどくも感ぜずに頂上三角点に着き、直下のパラグライダー離陸基地でランチタイム。眼下に平の沢池、亀岡盆地が広がり、真正面に行者山、半国山。北摂の山々の展望を楽しむ。

三角点（三等）に戻り集合写真。大倉さんご用意のプレートには「点名・寺山」とある。昔はお寺さんが麓に多かったとか？

下山はおとなしく往路であるが、小石が転がるなどなかなか厄介な道である。しかしこれ以外に三郎ヶ岳への一般道はないのだ。今回当初に下山予定の南西尾根は、2014年12月に訪れた時は、道らしきものは始めはあったが、倒木の連続となり、急斜面も出てきた。何とかパラグライダー場に着き、頂上からは小口への道を、バスに間に合わせるべく転げるように降りて、楽しくない山だった。その後、山と渓谷社の3回目の分県登山ガイド「京都府の山」（2017年4月発行）の取材を手伝うこととなり、初登場の三郎ヶ岳を担当することになった。さてどう切り込んでいくか、次には来たくない山と思っていたが、ともかくあちこちから登ってみることにした。

まず再び南西尾根からはさらに荒れていて、到底紹介はできないルート。小口の一般道から東南に分かれP510を経て北舎峠へ向かうルートは踏み跡もあり、地蔵山も大きく望め、おすすめ。（台風後はどうなっているだろうか？）峠の石室のお地蔵様を探し回った。松尾神社へ向かう道を取り違え三俣川に出た時、思いがけず素晴らしい桜並木に出会った。パラグライダーへの道はどこから来るのだろうと辿って行ったら遠かった。そのうえ七谷川のバス停に出たところで、バスが行ってしまい、やけくそになって亀岡駅まで歩き、JRに乗って、遠ざかる三郎ヶ岳にあそこから歩いてきたのだと思うと感慨深かった。行くごとに山自体もだんだん面白くなってきた。山麓の平の沢池のオニバスは、開花の当たり年で見事だった。出雲大神宮に七福神巡りと、なかなか楽しめ、美味しい亀岡の野菜の仕入れというおまけもありなのだ。

さて本日は早々、2時半過ぎに下山。それが良かった。私は間もなく建て変えとなる八木駅の駅舎を見納めておきたく、大倉さん、直子さんを無理に八木駅にお送りし、一人ではあるがちょっとリッチに、平日の高速道路に千代川より乗る。向日町のジムに駆け込むや否やゲリラ雨。京都市内も一時暗くなったそうだ。老ノ坂をトロトロ走っていたら、大変だったと思う。皆様、暑い中お疲れ様でした。

実施日：2019年7月23日（火）
参加者：中川　寛（L）、大倉寛治郎（SL）、遠藤将一、能田直子、森　栄司、津田美也子、（友の会）川嵜紀久子、京極明美

三郎ヶ岳頂上にて

巨木探訪

福井県おおい町名田庄周辺（自然保護委員会７月例会）

岡田茂久

2019年7月31日（水）、福井県名田庄村周辺の巨木観察。梅雨も明け天候は上々で夏空が広がっている。今日も暑くなりそうである。四条大宮を9:00出発、R162号線周山街道を北上し道の駅ウッデイ京北で小休止、美山町を経由し以前は国鉄バスの終点であった鶴ケ岡から、福井県境の堀越トンネルを抜け、今日の第一目標福井県名田庄西谷の「日枝神社」到着は11:00であった。境内の目指す巨木は幹周5メートルの「銀杏」、大杉は何本かあるが「銀杏」の巨木の存在は確認できず。残念。巨木探訪では枯死、台風で倒壊等で伐採されていることが往々にしてあるという。

近くの名田庄下集落の「苅田比賣神社」に回る。同じ名田庄村小倉にある「苅田彦神社」の祭神とご夫婦の神様である。若狭にはご夫婦の神様が別々に祀ってある神社が多いようだ。外から見ても境内には巨木が散見し期待される。目的の福井県天然記念物指定の「ムクの木」は姫宮らしいこじんまりした社殿の脇にあった。推定樹齢300年、幹周約7.5メートル、樹高は約17メートル。見た目は真ん中から大きく二つに割れて痛々しいが、樹勢は枝を拡げ葉も青々とすこぶる旺盛である。

次いで名田庄村三重集落の若宮八幡神社を訪ねる。小さな集落なのに判り難くようやくたどり着いた。頑丈な金属網の害獣防止柵外側の小さな社殿で、幹周7メートルという目的の「タブの木」は巨木というにはしょぼかったが、どうやら5月の「藤」の方が有名らしく立派な案内板が建っていた。

「名田庄村レストハウス」にて昼食。山村にこのような店がある事態珍しいが、客もそこそこでメニューも多く美味であった。午後はR27を経由せず一旦R162を口坂本まで戻り、旧石山坂峠越え福井県道16号線に入る。途中から旧道が分岐し、県道16号線新道は平成24年完成の「天空のループ橋」もあるピカピカの新道、素晴らしい道路で話のタネになる。石山坂峠を降ると石山で県道1号線に合流する。県道1号線を左折し府県境を越えると、京都府道1号線となり和知綾部方面に至る。

我々は石山で右折し若狭本郷方面に向かう。2キロ程の分岐を左折し、岡安集落の依居（えこ）神社の福井県天然記念物の「モミの木」を訊ねる。立派な石造りの鳥居の正面にでんと構えるのは社殿では無く、なんと「モミの木」である。案内板には樹高約50メートル、福井県で1位、全国で7位らしいが（台風で先端が10メートル程折損したとしているが、実際は30メートル程度に見える）。幹周約6メートル、推定樹齢600年とある。うろこ状の樹皮がなんとも凄い。境内には他にも様々の大木が生育していた。

次いで県道1号線を北上、2キロ程の分岐を今度は右折し父子（ふし）集落に向かう。正面に高々と舞鶴若狭自動車道の陸橋が立ちはだかっている。静志（しずし）神社、祭神は少名毘古名神（すくなびこなのかみ）大国主命の国造りに協力した神様で、一寸法師のモデルとなった神様である。

静志神社の「スダジイ」は樹高約15メートル、幹周約6.7メートル、樹齢は多くの巨木が300年～1000年と案内してあるが、推定樹齢100年～199年とあるのが、なんとも慎ましい。14:00に出発。

帰途はR27からR367の朽木、大原経由で帰京した。

実施日：2019年7月31日（水）
参加者：仕名野完治、八木昭二、山村孝夫、柏木俊二、岡田茂久

ファミリーハイク＠丹波 美女山登山報告

伊原哲士

2019年1月から日本山岳会京都・滋賀支部として毎月1回京都新聞丹波版に『丹波の山々』を連載している。連載に尽力してくれたのは大槻雅弘委員だ。地元では丹波の身近な山々を紹介したこの連載は好評だという。

その流れの中で、「今年の8月11日の山の日は丹波の山で親子登山を企画しよう」という話しが、大槻雅弘委員から支部役員会に提起された。支部役員に異存はない。紆余曲折の中、「親子登山」は世情を反映して「ファミリーハイク」となった。登山予定の8月11日は暑い。山域も議論の末、初心者や子供さんも登れる山として「美女山」に決定した。「美女山」の標高は482m。二等三角点。点名も同じく「美女山」。ルートは初心者でも比較的登りやすい大円寺ルートとした。

京都新聞丹波版『丹波の山々』の第7回「美女山」の執筆者は笠谷茂委員。掲載日は7月14日だ。当日の山行リーダーは「美女山」の執筆者の笠谷茂委員に決定した。サブリーダーは須藤邦裕委員と土井文雄委員。会員、友の会会員で一般参加者をサポートする登山と

した。

今年の８月は猛暑日が続く。８月 11 日当日、集合場所の丹波マーケスへはお盆の渋滞があり、地元の参加者は別として、スタッフも含めて幾人か遅れた。この為、先発と後発に分かれて出発した。乗り合わせで大円寺の墓地の駐車場に車を置き、獣よけのゲートを開けて急坂を登る。湿度の高い猛暑日であったが、登山路はスギやヒノキが木陰をつくり歩きやすかった。休憩と水分補給をこまめに、各自のペースで山頂に到着。遠望に愛宕さんも見えた。山頂で集合写真を撮り、下山。

車で琴滝に行き、昼食後、流れ解散した。今回の８月 11 日「山の日記念」の「ファミリーハイク @ 丹波」は久しぶりに多くの会員・友の会会員が参加してくれた。京都新聞も広報して頂き、一般参加者も喜んで頂けた。多くの方の援助で登山が安全に実施された。感謝したい。

地元から参加された一般の方から「いつも眺めていて登る機会がなかった。良い機会を作って頂き有り難うございます」との声は、ボランティアで参加されたスタッフには何よりの「報酬」でした。

最後に「美女山」の由来であるが、諸説ある。秀麗な山容から「美女が横たわっている姿に似ている」という説、「美女の眉に似ている」という説、「眉の上に見上げる山」ということから、眉上山（びじょうやま）が訛り美女山に変化したという説がある。

実施日：2019 年８月 11 日（日）
参加者：浅原明男、伊原哲士、遠藤将一、大倉寛治郎、
能田直子、大槻雅弘、岡田茂久、笠谷　茂、
須藤邦裕、土井文雄、中川　寛、松下征悟、
松下征文、村上　正、森　栄司、八木　透、
山内孝文、山﨑　泉、
（友の会）川嵜紀久子、京極明美、
宅間　仁、中塚智子、京都新聞社４名、
一般含む総勢は 45 名

ファミリーハイク美女山集合写真

健幸登山教室３～４回

松下征文

３回：９月８日（日：晴）

正面谷―コヤマノ岳南尾根―武奈ケ岳－イブルキノ木場－八雲ケ原―北比良峠―大山口―正面谷のルートで実施。

読図を中心にマンツーマン講習です。

コヤマノ岳南尾根には、金糞峠から奥の深谷源流を八雲ケ原へ 20 分ほど歩くと左に谷が現れます。その谷を詰めていくと南尾根の登山道に出ます。尾根末端からも登山道があります。シャクナゲ開花時はお勧めのルートです。今回は沢から尾根へのルートを選びました。

予定タイムで武奈ケ岳山頂着、地形図整置と展望について話し昼食としました。

イブルキノ木場経由で八雲ケ原へ、八雲ケ原は国定公園特別保護地域ですが、現在は放置状態です。木道は腐食して渡るのは危険です。

北比良峠に出ると、今日も素晴らしい展望が楽しめました。

峠よりよく整備されたダケ道を大山口へ無事下山。

ダケ道はレスキュー比良メンバーの W さんが日曜日ごと整備を行っています。

講師は、松下征文、竹下節子、金糞峠まで村上　正

参加者：一般参加者女性１名

４回：10 月 20 日（日：曇のち晴）
イン谷口―釈迦岳ワンゲル道―イチョウガレ―釈迦岳―カラ岳東分岐―旧リフト道―神璽谷分岐―イン谷口のルートで実施。

天候は回復傾向なので予定通りに。

今回は、読図とビバーク対応について講習しました。

読図については、登るルートの概念を把握して、概念図を作ることの重要性を理解していただき概念図を作ることにより道迷いを防ぐ、迷ってもすぐに気が付くようになるということを話しました。

ルート上で一番心配していたイチョウガレは少し崩れていますが問題なく通過できほっとしました。

釈迦岳山頂は風が強かったので少し西に進んだところで風を避けて昼食。

昼食後に道迷い対応と、ビバークについて安心出来る最小限の装備を救急用品と共に実物で説明し、ツエルトやエスビットを体験してもらいました。

今回の参加者募集は、会員の声掛けと、フェイスブッ

ク活用で効果がありました。
講師は松下征文、村上　正の２名。

参加者：友の会―宅間　仁、一般参加者７名、一般参加者には、愛知県額田郡からの3名もいました。

お月見山行と巨木観察

山田和男

21 日、台風が予報される中、定例のメンバーで出発する。誰が雨男か？晴男の私が来ているからこの程度でと主張する者もあり。時々小雨が降る程度だが雲が垂れ込んでいる。展望を楽しみにしていた守屋山の山行は諦めた。

飯田 I/C でおり、天竜川沿いに高森町の松岡城址を目指す。松岡城址は広く妙心寺派松源寺があり二の丸跡、三の丸跡、寺の周辺等の一本杉を探して彷徨っているとき若い僧侶に聞くとこの城址は南北朝の頃のもので、平安期の古城跡は、少し離れて見えるあの大きな杉の所と指差し教えてくれた。古城跡の一本杉（幹周り 6m）は、過去には夫婦杉と呼ばれていたが合体したらしい。杉の北側と南側では葉をさわった感じが違った。

松岡古城址の一本杉

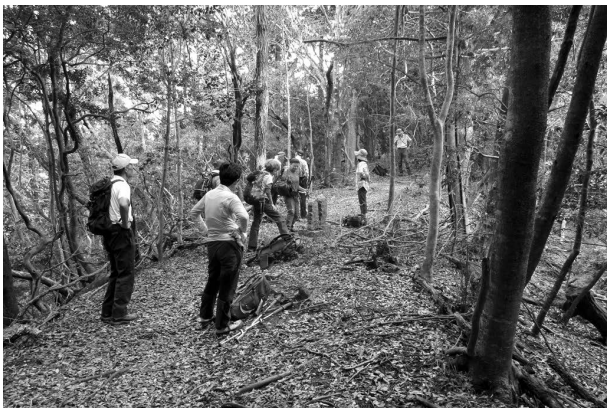
次は近くの牛牧神社の杉（幹周り 5.7m）。高速の下をくぐったところ、鳥居の横にあり若々しいが下のほうは枝打ちをされたようで横枝は無い。果樹園の中にある泰山神社の杉（幹周り 5.9m）は杉の並木になっており最前衛の物が最大である。松川町に移り七椙神社の七本杉（幹周り 6.9m）は七本に番号が振ってあり順番に歩き本殿をお参りするようだ。前列の四之杉か六之杉が最も太いようだ。立派な神社であるが河岸段丘のせいか本殿の上を大型トラックが走るのが見えるのが残念である。

天竜川を渡り秋葉街道を走り北上し分杭峠を目指して行くと狭い道で多くのダンプカーと擦れ違うが大鹿村に入ると道が広くなる。これはリニア新幹線工事の残土運搬だそうだ。峠近くの北川集落まで行きたかったが天候・時間を考慮し引き返した。大鹿村の古老の話では鹿塩温泉上流の入沢井集落に円通殿の逆銀杏（幹周り 12m）があると聞き探しに行く。少し迷ったが狭い山道を行くとお堂の横に辺りを暗くする立派な雄木の銀杏があった。このお堂はお寺か神社か解らなかった。

本日の泊りは、「ワーゲンハウス」、場所と名が一致しない。過去のペンションブームの頃のネーミングか。建物は少し古いがしっかりしている。夕食はイノシシ鍋をメインに辛めのもろキュウ、シシトウ、ナスの肉巻き、ニラレバ炒めと地元食材で美味しかった。特番は揚げ饅頭、地域では春秋のお彼岸、お祝い事には食べるそうだ。おかみさんと談笑していると母親の実家は円通殿の神主だったそうだ。あそこはやはり神社だった。

22 日、今日も曇り空。守屋山は止めにして巨木観察に変更する。松川 I/C から高速を行くと南アルプス、甲斐駒、千丈、鋸がシルエットで見える。岡谷 I/C でおり諏訪大社下宮秋宮のケヤキ（幹回り 5.5m）へ、やはり人が多い。次の茅野へ向かう途中富士山がと一瞬見えた。塩沢の瀬神社のケヤキ（幹周り 5.5m）、芹ケ沢の子の社のケヤキ（幹周り 5.6m）、湖東須栗平の白山社の大柏樹（幹周り 4.3m）は立派な柏であるが道端にあるのは可哀想に思う。中道の神明宮のサワラ（根周り 5.8m）。周辺の八ヶ岳の裾、高原は黄金色の稲穂、コスモス等の花が美しかった。入笠山の麓、御射山神戸八幡社のケヤキ（幹周り 7.7m）は社殿の横にある。諏訪大社前宮御室社のケヤキ（根周り 5.7m）は駐車場から少し登ったところにあった。ここを最後に諏訪 I/C から塩尻に向かう。19 号線沿いの贄川のトチ（根周り 9.0m）は何度も見ているがやはり大きい。地元の女性がトチの実を拾っていた。我々も拾ったが後はどう

神戸八幡社のケヤキ



岩尾山山頂にて

するんだろうか。孫のオモチャとの話もあった。後は薮原から本日の宿「野麦の里」へ。

23日夜中より雨、風が吹いている。台風が日本海を進んでいるので北陸道を止めにし、中津川へ向かう。途中栗、ブドウ、ナシ等々秋の産物を買いこんで京都へ帰る。

実施日：2019年9月21日（土）～23日（月）
参加者：山村孝夫（L）、柏木俊二、伊原哲士、山田和男、
（会員外）野間勝巳、内村百合子

山歩会例会

岩尾山

鮎川　滉

「登山はあらゆる年齢層が参加可能」とお聞きしたことがある。しかし、今春、不覚にもカゼをひき更に猛暑にトレーニングはおろそかになり次第に心が動かなくなり身体が“錆”つくように感じ「これはまずい。山を歩かなければ・・・」と思っていた。そうした時、仲間から電話があり「歩こう！」とハッパをかけられ清滝の渓流沿いを歩いた。やっぱり歩いた後は心地よく意欲が盛り返す。『支部だより』より9月例会山行を調べると「体力＝1、技術＝1」とある。しかし「岩尾山」は修験者が荒行を積んだ行場があるようで山名からも急峻な岩稜をイメージした。地図を調べるとルートには崖や岩の表記はなく等高線もゆるい。参加を申し込む。

久しぶりにお会いした9名の仲間は若々しく輝いて見える。リーダーから変更が告げられ距離と標高は短縮され有難い。息障寺下の駐車場で下車しリーダーお手製の写真パンフと地図が配られ手にして歩き出す(10:30)。歩き出してすぐに、まるでガマガエルが土から頭を出したような奇岩があり、右には「黒門」があり意味ありげな道がのびている。階段を登り息障寺へ。拝殿に立つと目の前に何か飛来する。見ると軒下にスズメバチ独特の巣があり一匹が威嚇するようにまとわりつく。静かに10mほど後退してうかがうと攻撃される気遣いはない。登路にある花崗岩からパワーを戴きながら登る。踏み跡は不鮮明となりトップを切り開くリーダーは度々顔面に蜘蛛の巣がかかり「顔面パック」と気丈にジョークを飛ばす。ワイヤーで固定された巨岩に登り東方の鈴鹿山脈の山並みを見ると中腹から山頂にかけ雲がたなびき山座同定は出来ない。石段を登り頭上にかぶさる巨岩を巻くと平坦なルートとなり落ち葉の上に二対の石仏が幾つか立ち並び我々の通過を見守ってくれる。県境尾根に案内板が立ち「あと10分ほど」とある。一旦下降し登り返すと山頂に達し標石を確認する。二等三角点と刻されている。美味しい酸素を深呼吸。昼食（11:35～12:20）。

下山に移る。ここで不可思議な体験・・・先ほど登ってきたルートを下降したが・・・数分進むとルート上に人為的に枯木がクロスして置かれている。何とここは西峰下である。方向は下降路に対し90度以上も方向が違う。下降直前に標石の“北”を確認したが誰一人疑問に思うことなく当然のように登ってきた道を引き返したはずだが・・・。かつて冬山で吹雪かれ読図ができず遭難に至った事例があるが、天候もよく見通しも利く低山でも何かに“化かされた”ように間違った方向に進んでしまうことがある。頂上に登り返し南へルートを取り下降する。

駐車場に戻り（13:30～）コーヒーと“もぐもぐ”タイムに歓談と情報交換に時を過ごす・・・
1・「芍薬甘草湯」の副作用は？　2. ハチに刺されたが逆に医学的効果あり？　3. 比良山系での遭難防止活動に於いて「入山者に登山届の提出を求めると頑固な拒否」反応　4. 登山ルート上の標識の全国的統一と管理　5. 高齢登山者の自覚と謙虚さ　6. 北海道日高山系・幌尻岳への渡渉と沖縄の山旅とハブ対策　7. 支部「山

行部会」より会員に希望山行の要請　8. 登山中、リアルタイムでスマホにGPS機能によるトラックの表示　9. 宇宙の果ては？　10. 後期高齢者の免許証返納・・・など

楽しく心地よい岩尾山ミニ・トレックに“身体”は喜びました！仲間たちに感謝！

実施日：2019年9月24日（火）
参加者：竹下節子（L）、能田直子、遠藤将一、
宇都宮道人、山内孝文、山口基継、鮎川　滉、
（友の会）川嵜紀久子、馬場信枝、小川一代

巨木探訪シリーズ
福井県大野市近辺
（自然保護委員会９月例会）

岡田茂久

9月25日、秋の声を聴いても、未だ気温は下がらず暑い日が続いている。今日は福井県大野までということで、何時もよりも早い8:30出発である。大原より安曇川筋を抜け、R303号からR161に入り、例により「道の駅マキノ追坂峠」で休憩。敦賀ICより北陸高速道に乗り福井北ICから、新しく整備されて無料の中部縦貫自動車道に乗換える。天候は上々で加越国境の加賀大日から越前兜の稜線、手前の報恩寺山、経ケ岳の奥に、取立山、大長山、赤兎山と続く山並が美しく見飽きない。勝山IC着は11:50であった。

今日の第一目標は勝山市鹿谷町西光寺の大杉である。西光寺とあるから当初は寺院境内と思い込み寺院を探したが、途中で地名と気が付き白山神社の大杉を発見。勝山市指定天然記念物「西光寺の大杉」樹齢約500年、樹高35m、幹周囲9m。京都の芦生杉の系統といい立派である。地元では「弘法杉」と呼ばれる。弘法大師空海が諸国行脚の折に当所で弁当を食べ、使った箸を地面に突き刺したのが成長したという。伝承通りなら空海が亡くなったのが835年なので、樹齢は1200年以上のはずだが……。樹齢は別として京都の芦生杉の系統というが立派なものである。

次いで再度、中部縦貫自動車道で大野市に向かい、九頭竜川の支流である真名川沿いの、昭和10年に国指定天然記念物に指定された「専福寺の大ケヤキ」に向かう。専福寺は真宗高田派の名刹である。大ケヤキの傍の瀟洒な白壁に太鼓櫓は絵になる。大ケヤキは1486年の専福寺建立以前からあったと伝え、樹齢800年以上。幹周は11m。昭和59年に腐食して大穴の開いた主幹の上部を切断し屋根を設けたとある。おかげで樹高は8mあまりになったが、周りの支幹はまだまだ元気で青々とした葉を茂らせている。この辺りの「森政領家」「森政地頭」なんとも由緒ありげな地名である。

すでに昼は廻ってしまって13時であったが、九頭竜川沿いのR135からJR越美北線の勝原駅を経て、荒島岳北麓の九頭竜川渓谷から打波川沿いに走り、鳩ヶ湯温泉手前の下打波集落にある大カツラに向かう。昭和34年県指定天然記念物「白山神社のカツラ」、御影石の立派な案内碑の記述には樹齢1300年。幹周は15m、樹高29mとあり見事にでかい。この木も白山開祖の泰澄大師が養老元年（717）に白山登頂の途中、この地で食事に使った箸を大地に刺したものが現在の巨木になったという。13:20になっていた。あわよくば鳩ヶ湯で昼食の目論見は「鳩ヶ湯は本日休業」の張り紙で残念。

大野に戻り由緒ありげな手打うどん「真邑」で昼定食。後は一目散に帰京したが四条大宮では18時を過ぎていた。国、県、市指定天然記念物3本を訪ねて走行距離450km余。お疲れ様でした。

実施日：2019年9月25日（水）
参加者：仕名野完治、山村孝夫、柏木俊二、方山宗子、
岡田茂久

大野市西光寺　白山神社の大杉（弘法杉）

大野市下打波　白山神社の大カツラ

山のスケッチ

宝ヶ池より比叡山を描く

山田和男

10月10日は、前の東京オリンピックの開会の日でよく晴れる特異日だそうだ。午前9時に京都市地下鉄「国際会館駅」に参加者6人が集合する。

青空の下、歩いて宝ヶ池へ向かう、途中からも比叡山の展望できる場所はあるが国際会館の近くを通り池を半周し駐車場近くのベンチでスケッチを始める。青い空、上部には少し紅葉した緑の山、青緑色の池そして対岸には四阿も見える。美しい景色だ。以前同じ場所から国際会館の直線的な美しさをきっちりと描かれた方もおられた。

山はわずかに紅葉したところ、池の周りには赤くなり始めた樹々、池には樹々の影、さざ波、カモが泳ぐ水切りの波、私には表現し得ない。約2時間それぞれにスケッチし腹が減ってきた。今日は先生の手直しを求める人は無く、先生が主役の山、影、水の表現手法等を説明された。後は池畔の喫茶店食事をした。午後は雲が出てきたのでここで解散をしたが引き続きスケッチをした人もいた。

実施日：2019年10月10日（木）
参加者：松田敏男（講師）、松下征文、中川　寛、
福田文夫、竹下節子、山田和男

越後の山
未知の山旅シリーズ（第5回）

笠谷　茂

シリーズ5回目の今回は目標地域を越後・南会津として参加者を募集。その後参加者で、目標の山、天候やメンバーの体調等も考慮した予備ルートを含め全体計画を決定した。

降雨の影響で22日の登山行動は断念したが、守門岳では天候に恵まれ深まりゆく秋の展望を満喫できた。

今回はワゴン車1台で移動。費用@ 2.6万円 / 人。

＜予定ルート＞
10/20　移動（京都・滋賀⇒堀之内IC⇒越後須原）
10/21　①守門岳（大白川コースピストン、布引の滝散策）　CL：笠谷、SL：関本
10/22　②粟ヶ岳（北五百川→粟ヶ岳→ブナの道→袴腰山→八木ヶ鼻）、CL：須藤、SL：関本
10/23　移動（中之島見附IC⇒滋賀・京都）
＜予備ルート＞
10/21，22　③光明山（笠堀ダムからピストン）、L：笠谷
10/21，22　④番屋山（吉ヶ平山荘からピストンまたは周回）、L：竹下
10/22　⑤八木ヶ鼻、袴腰山（八木鼻キャンプ場よりピストン）、L：中塚

10月20日（移動）：京都・滋賀⇒堀之内IC⇒越後須原（民宿治平泊）

8時に名神高速道路黒丸PAで集合し山旅スタート。北陸道から関越道に入り堀之内ICへ。車窓の山々は雲に隠れていたが日本海は穏やかであった。15時民宿治平着。

10月21日（①守門岳）：民宿治平⇒大白川登山口→守門岳→布引の滝→大白川登山口⇒八木ヶ鼻キャンプ場コテージ泊

5時に起床し、5時30分に車にて出発。明け行く景色の中に秋色に変わり始めた守門岳が現れる。民宿の方の話では紅葉は例年より遅いという。

かやの広がるスキー場を登り、6時に大白川登山口着。ここで朝食をとり6時45分出発。かやが混じる草地を過ぎるとブナ林の急登が始まる。くの字に曲がったブナの木に豪雪地帯であることを改めて感じる。尾根道は高度を上げるにつれ展望が開けてくる。前方右手に守門岳（袴岳）が見える頃、背後には越後三山が存在感を高めてくる。越後平野や会津方面は雲海が広がり、会津朝日岳の稜線から越後側に滝雲が流れ落ちる。エデシと呼ばれるビューポイントを過ぎても急登が続くが、やがて緩やかになり水場が現れ休憩をとる。

枝沢に沿って進むと藤平山へ延びる尾根道と合流する。草地となり視界が開け、浅草岳の背後に会津の山々が連なる。燧ケ岳の双耳峰が目に留まる。尾根の行く手に聳える守門岳山頂まで標高差で250m。展望を楽しみながら足を進める。9時45分、水場から1時間で守門岳（袴岳）山頂に到着。

山頂では青雲岳方面から来た登山者がそれぞれの山頂を楽しんでいた。我々も記念撮影、昼食そして大展望を楽しむ。

二等三角点（守門岳、1537.2m）がある山頂には遮るものはない。北側は爆裂火口を起源とする浸食カルデラがU字型に広がる。その背後に粟ヶ岳、更には飯豊山塊も確認できる。右には南会津、越後の山々が波濤

の様に連なっている。

10時30分、山頂をあとに往路を下山する。途中、布引の滝への周回路であるフィックスロープが断続的に続く急勾配を下り滝の展望台へ。ゴルジュが続く大雲沢へ雪蝕壁を落ちる一筋の流れは圧巻である。染まり始めた山肌と背後に聳える守門岳という絶景を望めた。

14時、登山口の駐車場に下山。日帰り温泉施設と隣接する「八木ヶ鼻キャンプ場」へ向かった。

10月22日（⑤八木ヶ鼻散策）：八木ヶ鼻キャンプ場→八木ヶ鼻→八木ヶ鼻キャンプ場

前日の天気予報では午後から降雨が強くなる予報であったが、夜半から降り出した雨は起床時には本降り状態であった。粟ヶ岳への登山行動は断念し停滞とする。

車で三条市街に夕食の買い出しに出かける。道の駅燕三条地場産業振興センターで洋食器、刃物などの地場産業製品の匠の技に接する。15時、キャンプ場に戻ると天候は回復。八木ヶ鼻（四等三角点：八木鼻、272.3m）への散策路を反時計回りに1時間程で巡った。八木ケ鼻は五十嵐川右岸に圧倒するようにそそり立つ垂直岩壁。ハヤブサ繁殖地として天然記念物に指定されており、クライミングは禁止。断崖上の山頂では染まりゆく山並みと眼下の景色が楽しめた。

散策後は温泉で暖まり、鍋を囲み懇親を深めた。

守門岳にて

布引の滝と守門岳

10月23日（移動）：八木ヶ鼻キャンプ場⇒中之島見附IC⇒滋賀・京都

6時、起床。部屋の片づけを済ませて宿舎を出発し帰途につく。無事滋賀、京都に帰着し山旅を終えた。

同行の皆様、ありがとうございました。笠谷（記）

実施日：2019年10月20日（日）～23日（水）
参加者：笠谷　茂（PL）、関本俊雄（PM）、須藤邦裕（PM）、竹下節子、中塚智子（友の会）

PL：Planning Leader（日程管理など山行全体のマネジメント）
PM：Planning Member（PLの補佐）

山歩会例会・芦生の森散策

能田　成

22日が天皇即位式のため臨時休日＝休日ダイヤだと当日の朝になって気がついて慌てたが、8時に烏丸五条を出発出来た。日本の南にいる台風のために天気はすっきりしない。

10月下旬の芦生演習林といえば紅葉の始まりだし、由良川源流の散歩なら楽そうだ。参加者全員がそう思ったかどうかは不明だが、17名という大部隊。初詣山行でもこんなに集まることは珍しいかもしれない。ガイドなしで入山する場合は人数や行動範囲に制限があるので、17名を2隊に分けたフリをするとのリーダー宣言に従い、9名と8名からなる二つのパーティがゲートで入山届をだした。しかしおよそ100メートルも進むと元の長蛇に戻った。

ところで老人たちは京大芦生演習林などと言うが、現在の正式名称は「京都大学フィールド科学教育研究センター芦生研究林」と無駄に長い。これは今世紀初頭の大学独法化にともなう改革の結果である。「改革で名は長くなり予算減る」これは当時田舎の大学にいた筆者のぼやき川柳だ。名前を変えるだけの戦術で良質

の研究が大量に生まれるのなら、教授など楽な商売だ。

由良川の源流は日本でも、と言うのが大袈裟なら、西日本の第一級の清流だ。

そういえば吉野川も変成岩地域を流れている。清流と変成岩には関係があるのか、などと愚にもつかぬことを考えて歩いていると、かつて灰方といった集落跡に着いた。この地から人が去ったのは昭和35年というから、60年前のことだ。今では苔むした石垣と平坦面が数か所、それと鳥居がかつては此処が生活の場であったことを窺わせる痕跡だ。住居跡の杉は当時の住民が撤去する時に植えたものらしい。演習林の森林軌道が廃線になったのもおそらくそれからほどなくのことと思われる。

赤崎谷出会いで廃線跡の橋が切れ落ちている。沢を渡れなくもないが、17名もいたら足を滑らせて水風呂に入る者もでるかもしれない。リーダーはここで引き返すことを宣言して、昼食となる。天気は相変わらずで、曇りと小雨の合間に気まぐれに日差しがある。紅葉はないが、天気は如何にも秋の北山である。元来た道を引き返す途中、コーヒータイムで時間を潰したが、2時30分には駐車場に着いた。当初、予定したもう一本の林道を歩くには時間不足なので、美山の茅葺の民家を遠望して帰路についた。

実施日：2019年10月22日（火）
参加者：中川　寛（L）、大倉寛治郎（SL）、森　栄司、
能田　成、能田直子、宇都宮道人、遠藤将一、
山口基継、鮎川　滉、幣内規男、
（友の会）京極明美、川嵜紀久子、小川一代、
辻田詩子、古谷英二、馬場信枝、角田恭子（17名）

芦生散歩

丹波の山々例会

八ガ峰

宇都宮道人

参加者は5名。地下鉄太秦天神川駅前ロータリーに集合、リーダー大槻さんのマイカーに乗車、8時25分、登山口に向け出発。道の駅でのトイレ休憩をはさみ、9時48分、知見登山口（南丹市美山町、標高340m）に到着。装備を整え、丁度10時に八ガ峰頂上に向け歩きはじめた。

八ガ峰は標高800m、二等三角点の設置された山である。山城、近江、越前、加賀、能登、丹後、丹波、若狭の8か国が山頂から望めることよりその名が付いたとのこと。

天候はくもり、回復に向かうとの予報。小雨にでも会わないことを願う。寒さを感ずることはなく、風もなし。

落ち葉の敷き詰められた柔らかな、つづら折りの道を登る。よく整備されている。10時10分、衣服の調節をして、給水。小休止。時折くもり空に晴れ間がのぞく。10時34分、「水飲み場」に到着。ザックを下ろし休憩。紅葉には至っていないが、落葉樹の緑の葉が美しく広がり、気持ちが良い。

10時41分、「スキー場跡」に到着。捨てられたスキー靴や朽ちた建屋の跡が残っている。ここまでスキー板を担いで登ってきていたのだろう。かつてのスキーの様子が想われる。10時55分、「京都府大野ダム知見雨量観測所」を通過。2m立方ほどの鉄製ボックスが3本のコンクリートの柱で登山道よりやや上方に設置されている。大野ダムの水量をコントロールするため、この場所の雨量がリアルタイムで送信されているのか、アンテナが付けられている。崩落して狭くなった登山道を慎重に進み、また倒木を乗り越えて進む。11時5分、

知見登山口

「南無妙法蓮華経」と記された石碑に到着、ザックを下ろして休憩、エネルギー補給。

そこから道はやや狭くなり、11時19分、「知井坂」の峠に着く。かつてはこの道も鯖街道として京都と若狭を結んだらしい。峠からの整備された道から少し外れ尾根に上がり、そこに置かれた地蔵さまを拝む。緩やかな尾根を行くと送電鉄塔があり、眺望が開けた。空はどんよりしているが、遠くの山並みが望める。また登ってきた道筋が確認できる。

大飯町から来たという、小学生を含む10人ほどのグループに出会う。すでに3時間ほどを掛けて登ってきたとのこと。若者、年配の方もいて、秋の山を楽しみにきた様子。

送電鉄塔からひとつピークを越し、やや急な坂を上り切ると、松の木が立つ頂上に着く。11時45分。広場になっていて、その中央に三角点があり、標識が立っている。標識の文字が消えかかっている。

頂上からは周囲の山並みとともに日本海も望める。くもり空だが雨の心配は無さそう。さすがに空気はひんやりとしているが風はなく寒さにふるえるようなことはない。5名全員、1枚のシートに靴を脱いで上がり昼食、またリーダー提供のうどんをガスバーナーで温め、いただく。

さきほどのグループも横で広がって昼食を取っている。当会が京都新聞に丹波の山々を紹介している旨をリーダーが告げると、福井山岳会の会員の方より「名田庄・美山　山歩きマップ」と題するパンフレットを贈られた。

山頂で約1時間を楽しんだのち、記念撮影、12時55分、往路の下山を開始。13時20分、南無妙法蓮華経の石碑のところまで戻り、木立の間から送電鉄塔が望めることを確認。13時39分、スキー場跡まで下り、ザックを下ろして休憩。大倉さん持参の串だんごをいただく。

せせらぎが聞こえ、14時15分、知見登山口に到着。行きには気付かなかったが、同じく南無妙法蓮華経の石碑が建てられている。

八ヶ峰山頂

帰路、ログハウスの喫茶店、カモノセキャビン（弓削町鴨瀬）でコーヒーをいただき、本業は林業という店主から地域の様子などをうかがう。16時20分頃、地下鉄太秦天神川駅に着、散会となった。（了）

実施日：2019年10月26日（土）
参加者：大槻雅弘（L）、大倉寛治郎、森　榮司、山﨑　泉、宇都宮道人

山水会講演会

明治初期の測量裏話

上西勝也

（要旨）

2019年は明治新政府が測量を開始して150年にあたり、6月には記念切手が発行された。これを機に明治初期の新聞記事二編をもとに、当時の測量・地図製作について、あまり知られていない愉快な話と、恐ろしい話の二話を紹介する。

第一話、京都では明治7年から内務省により、お雇い英国人の指導で三角測量が行われた。市街地に三角点の櫓（やぐら）が設置されたが、夕涼み、酒盛りに利用する珍事が起こった。一方、この測量に従事した内務省の梨羽時起は、初めて3千メートルを超す赤石岳の測量後、海軍に転じ日露戦争の旅順港封鎖で司令官として活躍した。

第二話、参謀本部では陸軍演習地や東京を中心とする測量、地図作成がフランス軍事顧問団の指導により行われた。明治11年頃から、陸軍の軍制はフランス方式からドイツ方式に替わることになるが、当時、参謀本部地図課で不審な連続死亡事件が発生する。この間、清国公使館への地図密売事件が絡み合い、事件の背景には参謀本部上層部による旧幕府、フランス派排斥の陰謀があったともいわれている。

日本の近代測量は、工部省、ついで内務省が三角測量を大都市からはじめ、全国へ展開しようとした。一方、陸軍は平板測量による迅速側図の整備をはかり、明治15年頃から内務省の測量分野を吸収した。第一話、第二話はその過程のできごとである。

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・

中川　寛

今年度の今西錦司賞を受賞された上西勝也会員を講師に迎え、山水会講演会が開催された。演題は「明治初期の測量裏話」で、内容は、上記講演要旨の通りである。

第一話では、京都の測量について紹介され、市街地に設置された三角点の櫓に登って酒盛りをした不心得者が巡査にとがめられたとの新聞記事（明治9年8月19日発行、讀賣新聞）のコピーが資料として配布され、当時の様子がわかって興味深かった。実際の「測量臺」の図が紹介され、登ってみたくなる気持ちもわかる気がした。国立公文書館蔵の明治8年10月作成の「京都三角網素図」が資料とし示されたが、測点として清水寺、東福寺、東寺、六角堂などの名前が記載されており、ランドマークとなる建造物が測量に利用されていたことがわかる。素図作成者として梨羽時起の名前が記載されているが、その後内務省地理局員として赤石岳に測量登頂し、さらに海軍に転じて日露戦争では海軍少将として従軍したことが紹介された。

京都の測量は英国人の指導で行われたが、予算不測と東京などに比べ優先順位が低く、1/20000の正式地図が作成されたのは明治45年になってからとのことであった。また、陸軍は平板測量（図解法）による迅速側図を制作しており、地図の作成には図工を必要としたとのことで、国土地理院蔵の明治16年作成の迅速側図例が示された。

図郭外には土地の著名な景観や建物などの「視図」といわれるスケッチが描かれていて興味深かった。

第二話では、明治初期の近代測量、地図作成に係る政治的な動きの中で起こった出来事が紹介された。明治14年の新聞記事（朝野新聞）、（東京日日新聞）や陸軍裁判所判決書（国立公文書館公開資料）などを基に、当時起こった清国への地図密売事件、画工・川上冬崖や関係者の謎の死について、資料を丹念に調査し、名探偵のごとく謎解きに挑戦される上西講師の博学ぶりには驚かされた。

当日配布された資料には、日本の近代測量150年記念切手（2019年6月3日発行）、英国測量局200年記念切手（1991年発行）やスイス連邦測量局150年記念切手（1988年発行）が、また、英国やスイスの三角点が紹介されていた。

最後に、参加者全員に地図展推進協議会作成の京都中心部の地図(1/10000)3種類が配布された。ひとつは、大正天皇御大礼記念として大正4年10月10日に陸地測量部が発行したもの、ひとつは、昭和天皇御大礼記念として昭和3年9月10日に大日本帝国陸地測量部が発行したもの、ひとつは、国土地理院が令和元年8月に撮影した空中写真で、京都中心部の変遷を俯瞰することができる貴重なものである。

日本の測量史、地図作成についての興味深い講演を聴いた後、講師を囲み懇親会が行われ、11名が参加した。

実施日：2019年10月16日（水）
参加者：27名（内一般参加者3名）

上西勝也講師

第10回日本山岳会「全国森づくり協議会」報告

伊原哲士

会場の東京大学生態水文学研究所は愛知県の尾張丘陵東部の瀬戸市にある。今から百年前に設立された。正式名称は「東京大学・大学院農学生命科学研究科・附属演習林・生態水文学研究所・赤津研究林」という。

当時、三大ハゲ山県と言われたのが「愛知・滋賀・岡山」である。原因は「窯業・製塩・製鉄」などで木材を大量に使った為だ。明治維新後の殖産興業の時代である。ハゲ山は寧ろ誇りでもあった時代だ。ところが山に木がなくなると、降雨時の保水能力がなくなり、洪水の原因となり下流への土砂流出は多大な災害をもたらす。荒れた山の修復は「国土荒廃」を防ぐ喫緊の国家的課題となった。東京大学生態水文学研究所の設立はこの背景があった。

1896年に治水三法（河川法・森林法・砂防法）が制定された。この法律は現在も活用されている国土保全の基本法だ。1905年に愛知県知事が東京帝国大学に「ハ

ゲ山の修復についての研究」を依頼。1922年に東京帝国大学が愛知県東部に「ハゲ山」を購入。演習林として研究所を設立した。これが現在の東京大学生態水文学研究所赤津研究林である。

「ハゲ山修復」と同時に始まったのが「水文研究」。「水文研究」とは簡単に言うと、土砂は水が運ぶので、山からの「量水」を計測すれば土砂の流出も予測出来るという研究である。気象・動植物生態系など総合的な研究も加味する総合的な研究といわれる所以である。

10月5日は午後2時に第10回日本山岳会「全国森づくり協議会」を開く為に東京大学生態水文学研究所に集合した。冒頭の挨拶は日本山岳会森づくり協議会を代表して吉川正幸高尾の森づくり代表、日本山岳会からは古野淳日本山岳会会長、地元日本山岳会東海支部を代表して高橋玲司東海支部長。

基調講演は田中延亮東京大学助教・東大生態水文学研究所所長補佐。「尾張東部丘陵の森と水の百年の変遷」についてお話しされた。尾張東部丘陵を中心とした百年の具体的なデーターから、ハゲ山から植生が回復していく経過がよくわかる。衝撃的だったのは、地球温暖化の影響だろうか1990年からこの30年で愛知県地域の平均気温が2度上昇し高止まりしている現状だ。気温が上がると水が上昇し、気象に重大な影響を与える。

日本山岳会の森づくり協議会の各団体報告は、「森の動物観察」で高尾の森づくりの会山崎勇会員。同じく「森の動物観察」で猿投の森づくりの会井藤恵美子会員。井藤会員は猿投の森の定点観測から「シカが増えてイノシシを追いやっている様子、外来種が定着しアライグマが確実に増えている様子」などを報告された。定点カメラに撮影された哺乳類動物は、アナグマ・アライグマ・イノシシ・ウサギ・キツネ・サル・シカ・タヌキ・テン・ネズミ・ハクビシン・リス・カモシカ・コウモリ・野ネコ・クマの17種類。他にヒミズ・モグラ・コウモリ・ムササビも観測されるという。猿投の森全体では30種類が生息するようだ。鳥類は26種類が撮影された。猿投の森のムササビは木の巣穴に近辺から採取した樹脂を敷き詰めて部屋づくりをしている。ダニが出るので頻繁に掃除して樹脂を替える姿が微笑ましい。カモシカも良く出没するが、上から目線で人を見下ろす場合が多い。「カモシカは賢い動物で、じっと動かない。これは人がカモシカの居る位置に辿り着く時間を計算していて、直前にカモシカが立ち去るのはこの為。観察されているのは人の方だった」という。

各支部の森づくりの報告は、関西支部が本山寺山森づくりの会の報告。本山寺山森づくりの会は日本山岳会関西支部と複数の団体が連合した会である。本山寺山森づくりの会の会長は茂木完治日本山岳会関西支部長。茂木氏は沢登りを得意とする「水の人」だが支部長になって「陸の人」が多くなったと笑っていた。京都・滋賀支部の藤尾の森づくりの会の報告は私が、昨年の台風21号被害と森の再生について報告した。広島支部は斎陽支部長を始めとする自然環境委員のメンバーが西条市の森づくりを中心とした活動を報告した。日本山岳会自然保護委員会からは谷内剛自然保護委員長を含め5名の参加。谷内自然保護委員長は「自然保護委員会と森づくり協議会は密接な関係として、今後も連携して活動したい」と連携の報告をされた。

猿投の森づくりの会は和田豊司猿投の森づくりの会会長が報告。「猿投の森は間伐をするが植林はしない森づくりだ。『森の音楽祭』や『森の観察会』など社会貢献活動もおこなっている。動植物の調査などもおこなう。課題として、会員の高齢化。観察会は沢山来るが、森づくりの作業は減少傾向。」とのこと。

翌日10月6日（日）は午前に赤津研究林を井藤会員の案内で周遊見学。赤津研究林は尾根筋がほぼ裸地だったことが、尾根筋のマツの植生でわかる。その後、砂防植栽や林業目的のヒノキ、スギの植栽がおこなわれたが、現在植林は停止している。天然生林は、主にコナラ・アカマツ・ヒノキ・コハウチワカエデが上層木にあり、中下層にヤブツバキ・ヒサカキ・サカキ等の常緑広葉樹類が存在する。アオハダ・ソヨゴ・ヒサカキなどの天然生の樹種が健在で、自然の遷移に任せた管理で土壌の流亡や裸地化は防げているとみられる。

午後は日本山岳会東海支部の猿投の森の見学をした。猿投の森の一部民有地は、愛知博覧会の前に「万博が来る」と土地投機の対象になり今で言う「原野商法」として細切れに所有者が存在するという。当然、手入れがされないので山は荒れる。猿投の森づくりの会は、それら荒れた森の整備もおこなっているという。日本の森の暗い現実と、そんな中で日本山岳会の森づくり協議会の個々のの森づくりが暗箱の中に一筋の光明を醸し出しているのに、少し元気が出た気がする協議会だった。

実施日：2019年10月5日（土）～6日（日）
於　　：東京大学生態水文学研究所赤津研究林と猿投の森
参加者：34名。藤尾の森づくりの会1名。本山寺森林づくりの会4名。猿投の森づくりの会15名。高尾の森づくりの会5名。広島支部自然環境委員会3名。本部自然保護委員会5名。古野淳日本山岳会長。（主な参加者。谷内剛自然保護委員長・川口章子前自然保護委員長・斧田一陽関西支部自然保護委員長・高橋玲司東海支部長･茂木完治関西支部長･斎陽広島支部長･吉川正幸高尾の森づくりの会代表・和田豊司猿投の森づくりの会代表）

追悼　高村泰雄さん

酒井敏明

デルファさんは今年6月4日あわただしくあの世に旅立った。84歳であった。

かれは数年前から肝臓に不具合があり、短期の入院・手術などを幾度かくり返していたが、友人たちに詳しく説明することはなく、私も気にかかってはいたが快活にふるまっていたかれを見て、その深刻さの度合いが全く解っていなかった。

昨年12月初めの年次晩餐会ではチョゴリザ初登頂60周年を記念する催しがあり、私も数年ぶりに出席した。中島道郎、平井一正、岩坪五郎、高村泰雄の4人はみな当支部所属であるし、札幌在住の芳賀孝郎を含む当時の隊員5人は壇上に並んで映画「チョゴリザ」鑑賞をはじめとする記念イベントに参加、宴会ではメインテーブルに皇太子殿下（当時）を囲んで着席した主賓であった。私自身は講演ホール入場に遅れドアの外で1時間以上待機の列に並んだために、かれらの晴れ姿を見る機会を逸し、情けない思いをした。終了後幸いなことに別室で芳賀の仲間学習院山岳会の面々が開いた小さな慰労会で、ほかの顔ぶれも加わり、平井、高村､芳賀などと少時談笑する機会があってホッとした。

その2週間後、福井市の県ふるさと文化館で開催されていた「没後30年　桑原武夫展」で､平井さんがチョゴリザの映画上映と講演をするというので私もついて行った。ちなみに、桑原隊長は敦賀市ご出身である。会場で講演が終わって明るくなってみると、われわれに告げずに一人で参会していた高村の姿を見つけ、質疑の時間には適切な質問を発したり、また答えたりしているのを見てたいへん嬉しかった。

今年にはいって5月中旬にかれが緩和ケア病院に入院したことを聞き､あれっと思ううち斎藤惇生ドクターからのお声がかりで、下旬のある日深草の京都医療センターの病棟に山の仲間数人がお見舞いに伺うことになった。設備の整ったきれいな病室で、発声に難があるからというので筆談をも交えて話すデルファであったが、予想していたよりはるかに元気そうに見えた。斎藤ドクターがもっぱら話を聞いておられたのだが、おそらく余命はあまり長くないと思われたようである。毎日通っているといわれた奥様とともにデルファは病室外まで歩いて出て、一行を見送ってくれたのであるが、ご本人は残された日があまり多くないと知ったうえで従容とそのときを迎える覚悟ができていたのだと思う。

京阪電車深草駅近くのセレマ稲荷シティホールで、6月6日お通夜、7日告別式が営まれた。

宗教色が少しもない、音楽葬であった。故人があらかじめ奥様やお子様たちと相談していたものらしく、いかにもデルファにふさわしい、湿っぽい所がなく、あかるい好感のもてる追悼の集いであった。祭壇にはたくさんのお花と遺影写真、友人たちと教室・研究室関係の人たちからのお花がいっぱい飾られ、司式と電子オルガン奏者、百人を超える参列者のみんながお通夜を作り上げたということもできる。友人代表の岩坪五郎さんがデルファのことを友情あふれ、かつ面白おかしく紹介し、デルファの弟高村直助さんが敬愛する兄のことを語り、長男高村芳樹さんが父の想い出の一端を話し、喪主としてお礼を述べた。セレモニーが終ると、クラシック音楽愛好の優雅な趣味の持ち主で自分が歌うことも得意であり、またお酒を愛したことでも人後に落ちることはなかった故人らしく､式場にテーブルが持ち込まれ、お酒とビール、サンドイッチ、お刺身、寿司などがひろげられて、なごやかで楽しい招宴のお通夜になった。

翌日の告別式、短いスピーチがすむと、正面に据えられたお棺の中に横たわるデルファのやすらかな顔に対面、ご遺体を埋めるように、遺族、親類、友人たちが次から次へとお花を捧げ入れて飾った。最後には蓋ができるか危ぶまれるほど花いっぱいになったお棺は霊柩車に載せられて式場をあとにした。

高村泰雄は1934年9月、大阪本町で繊維製品を扱う商家の6人兄弟の3男として生まれた。53年大阪府立高津高等学校をきわめて優秀な成績で卒業、京都大学農学部に入学、山岳部に入部した。高校では山岳部で大活躍し、同部を世間に知られる存在に育て上げた有力部員であったという。同じ年に京大山岳部に入った新入生は10人を越えるが、登山の経験をあまりもたな

い新入部員が多かった当時においては、多くの上級生部員がかれの新加入を喜んだという。自分のことを語らねばならないが、私は敗戦の翌年に中国青島市から引き揚げてきて、京都府立第三中学校一年次に編入学し、52年に鴨沂高校を卒業、京大文学部に入学し、山岳部に入った。部歴という言葉があるかないか知らないが、私は高村の1年先輩、2歳年上にあたる。高校での私の成績はまずまず、京大入試に合格したら級友たちはみなびっくりしたというし、部活動とは無縁の生徒であった。せっかく大学に入ったのだから山登りでも始めてみるかという初心者であった私に対して、かれは高校時代から岩登りも山スキーも熱心に練習し、経験も積み意識をもって京大山岳部に入ってきた、1回生のなかでも目立つ存在であった。

最近の若い人たちには気が付きにくいことだと思うが、1950年代はヒマラヤ登山史における輝かしい黄金時代であった。高度8000メートル以上の高峰ジャイアンツは全部で14座、ヒマラヤ、カラコルムの両山系にだけあるのだが、そのうち13座まで1960年までの11年間にあいついで初登頂され、中国領内に位置して外国隊が接近を許されず未踏のまま残ったシッシャ・パンマも、64年に中国隊に登頂された。イギリスが過去7回派遣した遠征隊をことごとく退け、少なからぬ犠牲者をも強いた世界最高峰エベレストが同じイギリス隊にその頂上を明け渡したのは、まさに高村が入部した年であった。日本山岳会は1956年マナスル初登頂に成功したが、その登山許可をネパール国王から得ることに成功した西堀榮三郎さんは、今西錦司さんが京都大学生物誌研究会の名で送りだし戦後初の訪問をはたしたので実現したのであったし、初登頂者はAACKの今西壽雄さんであった。高村はこのヒマラヤ登山黄金時代に現役学生生活を送っていたことになる。

京都帝国大学には旅行部と称する学生団体があって、先鋭的な近代登山を志向する今西錦司さんなどの学生たちはその山岳班というべきグループであった。かれらはロンドンに創設されたアルパインクラブ刊行の雑誌『アルパインジャーナル』やヨーロッパ人登山家たちの著作を読んで、スポーツ登山、探検登山について学び、日本アルプスなどの高峰、渓谷を舞台に活動を続けていたが、やがてヒマラヤの未踏峰こそ目指すべき対象であると考えるに至り、その実行団体として1931年に京都学士山岳会（AACK）を創設した。30年代に英領インド、シッキムのカブルー峰、次いでカシミールのK2への遠征隊派遣を計画したが共に許可が得られず挫折、転じて満州（中国東北地区）、蒙古に未知の山野を求めて行動を展開したが、第2次大戦開始とともにすべての計画がつぶれたのは、時節がら当然のことと言わねばなるまい。

敗戦の2年のち1947年に京都帝大山岳部が発足、49年学制改革で京都大学山岳部と看板は変わり、荒廃疲弊した日本が朝鮮戦争特需などもあって次第に復旧から経済伸張、成長へと社会が変わりゆくにつれて、学生山岳部は次第に力をつけてきたのである。京大山岳部は1950年ごろから毎年10人前後の新入生をむかえ、夏と冬の合宿、他の季節の分散的小山行、縦走、沢歩き、岩登りなど活動は多方面にわたり、さかんになった。戦前の探検志向の大先輩たちとの接触交流がおこなわれるには多少時間を要したとはいえ、一人前の大学山岳部に成長したといえるのではないか。奇しくもこれがヒマラヤ黄金時代と時期を同じくしたのである。

私が高村たちの新入部員と顔を合わせたのは53年4月下旬、大原金毘羅山ふもとでおこなわれた新人歓迎山行であった。江文神社境内で一夜を明かしたのち、2日目金毘羅の岩場で岩登り訓練がおこなわれる。この時滑落事故が起こり一人犠牲者を出す結果となった。入部したての新人たちは大きな衝撃を受けたのであるが、たいへんな歓迎会になってしまったものだ。

6月中旬兵庫県道場での夏山予備合宿を終えて、7月17日～24日穂高涸沢において夏山合宿がおこなわれた。中島道郎リーダーのもとに、1回生6人、2回生10人、3，4回生は合わせて6人、計22人が参加した。先発隊は18日早朝島々を発してその日のうちに涸沢宿営地に着いたが、本隊は次の日雨のなか島々をバスで出発、長雨のため道路が数ヶ所損壊を受け、バスは坂巻トンネル手前でストップ、折り返しとなった。部員たちはザックを背にバス道を歩き、夕刻上高地には着いたが時間切れ、やむなく明神館に仮泊。20日午後やっと涸沢に着いて全員がそろった。予定より1日遅れた。

第1日は降雨、次の日も同じ、降り続いた雨は23日夕刻になってあがり、グリセードの練習を半時間ほどしたところで夕闇せまり、終了。24日唯一の晴天をフルに使って奥穂高岳、北穂高岳、前穂高北尾根など班別に分かれ、雪渓の登降や稜線歩きがある程度はできた。しかし、翌早朝解散という、数年来稀な不満足な結果に終わった。それというのも、アンナプルナⅡをめざすAACK遠征隊の船荷発送が月末に予定され、上級生部員の多くが早く帰洛して準備作業に従事する必要があって、合宿を窮屈な日程で組まざるを得なかったうえに、梅雨末期の大雨が重なったのである。中島リーダーは部報の夏山合宿報告に、悪天候の連続と遠征準備の応援という二つの要因をあげ、「新人諸君にとっては非常な不幸事であった」と総括せざるを得なかったのである。

ここまで書いて、この年の新入部員たちがとりわけ不運不幸な部活動の4ヶ月を送ったであろうことに改めて驚き、かつ気の毒に思わざるを得ない。高村も私

も連日の雨に閉じ込められたこの合宿に参加したが、数人ずつ小テントに分散宿泊し、濡れた寝袋にくるまりながら歌ったり駄弁ったりの時間があまりに長かったせいか、記憶に残ることがほとんどない。

かれは10月には冬合宿のための荷揚げと整備のために笹ヶ峰ヒュッテに入り、年末から正月にかけておこなわれた同ヒュッテにおけるスキー合宿に参加した。同じ時期に、私は2回生以上の部員が取り組んだ前穂高岳北尾根登攀を主目標とする合宿に参加していて直接的には知らないのだが、高村は笹ヶ峰では抜群のスキー上手の面目を発揮したに相違ないと思っている。

このころ、もち米を原料として新たに開発された食品アルファ澱粉というものがあって、京大山岳部では商品化されていたアルファ餅を山の、特に積雪期登山の携行食として好適であると評価し、試行的に採用しつつあった。これをおどけてデルファアンプンと言ったものがいて、とりわけ高村はこのことを喜び、また好んでアルファ餅を食べたとして、デルファがかれのあだ名として定着することになる。

春休みには小山行の一つとして、スキーで弥陀ヶ原を御前乗越まで登り、剱岳、立山の両峰に登る山行が計画され、中島道郎（医3、ダンナ）、中島伊平（経4、チョースケ）、高村（農1、デルファ）と酒井（文2、オシメ）の4人がパーティを作ることになった。現在は富山地方鉄道立山駅下車、立山ケーブルカーで美女平駅まで、高度差約500mは約7分で弥陀ヶ原溶岩台地の西端にとりつくコースであるが、私たちの入山は1954年3月17日、このケーブルと軌道の新設工事が終幕をむかえる頃であった。降雪期工事休止期間で、軌道沿いに、トンネル内は暗闇の中を、ザックとスキーを背負って3時間のアルバイトであった。

開業前の美女平駅から上はスキーの世界だ。途中、追分小屋、地獄谷温泉など、休業閉鎖中の山小屋に泊まり、降雪に沈殿を強いられたりしながら、22日昼過ぎやっとこさ御前乗越に登り着いた。小屋の前でスキーを履き、剱沢上部をトラヴァースして別山尾根上のクロユリノコルに着き幕営した。23日快晴強風、立山三山を往復。24日剱岳登頂、帰幕ののち濃霧降雪で停滞した。悪天候が続くと予想されたため撤収がきまる。25日御前乗越小屋まで戻って泊り、翌日も霧のち風で停滞。結局27日雷鳥沢をアイゼン装着で降り、あとはスキーで弥陀ヶ原をくだった。高度がさがるとともに雪がべたつき、美女平まで帰り着くことはできず、とある小屋に仮泊した。地鉄藤橋駅に到着したのは3月28日午前9時過ぎとなった。

この10日ほどの山行を共にしたことにより、高村デルファの人となりを相当知ることができた。かれは勉強家であり物事をよく知っており、誠実で、やさしく思いやりに満ちている、付き合って心楽しくさせてくれるパースナリティの持ち主である。心配りをする人、他人を立てようとし、でしゃばることはない。好ましい特質ばかりで、これといった欠点は無いといってよい。お酒を愛する性向はほの見えた程度であるが、歌うことが好きで各種の歌を高唱し、初めて教えられたドイツ語の歌詞を熱心にノートに書きとどめた。地獄谷温泉ホテルには雪に降られてたっぷり2日間沈殿した。雪囲いを巡らせて真っ暗の屋内、雪が積もった床にテントを張って暮らしたのだが、朝から晩まで4人で歌っていたことを思い出す。

その上、山登りについて言えば、高津高校の時から同級生の中に優れた友人たちを持っていたのだろうと推察しているのだが、あるいは立派な指導役の教師がおられたのかもしれない。国民体育大会に山岳部門があるが、かれは2年生の時第6回国体（大山）に参加したということは最近知った。私自身についていえばこれは2回生を終る時期で、入部後2年間の「部活」で山登りがいかなるものであるのかうすうす解り始めた状態であったのに、デルファは高1から4年間熱心に山に取り組んできたのだから、かれの方が実質先輩で私はデルファに兄事するべきであったのかも知れない。アイゼンを着用しピッケルを振るう登攀なら私に一日の長があると自負していたが、スキー滑走になれば文句なしにデルファに軍配が上がる。

雷鳥沢の比高約750m、登りはほとんどワカンかアイゼンのどちらかを着けていたのだが、降りも同じで、勾配がだいぶん緩やかになった下部まで降って初めてスキーを履くことを決めたリーダーは、おそらく私とチョースケさんの心もとない滑りぶりをそれまでに充分観察していてこの断を下したのだと思う。雪の多い但馬の産であるダンナは山岳部きっての練達山スキーヤーであり、デルファがなかなかのスキー使いであることはこの山行でよく解っていたので、御前乗越からのスキー滑走を回避したことを残念に思っていたに違いない。

デルファ2回生、私は3回生の1955年3月の毛勝山から剱岳までの極地法登山は、OBを含む17人が参加し1ケ月を要した大がかりの登山であった。この時は最終キャンプに詰めた支援隊と登頂隊に役割は分かれたが、いろいろと思い出の多い春山合宿であった。

デルファは学部卒業のあと大学院に進学、最終的に学籍を離れたのは1966年である。私は卒業後2年のブランクのあと58年に文学部史学科に学士入学し、そのあと大学院に6年在籍したので、この数年のあいだに幾度も現役部員たちといっしょに山に入った。ところが、剱と穂高で各1回の夏山、鹿島槍ヶ岳東尾根の冬山など合宿形式の場合が多く、小グループ山行をデル

ファといっしょにしたことが無かったことが今にして悔やまれる。

デルファは1958年AACKのチョゴリザ遠征隊（桑原武夫隊長）に最年少で選ばれた。期待通り存分の働きを見せ、見事にその責任を果たした。バルトロ氷河の奥に位置し、北方のK2、ブロードピーク、ガッシャーブルムの高峰群と対峙するこの山は「花嫁の峰」の愛称で知られた秀麗な山であるが、アプローチは長く厄介だし登攀自体なかなか手ごわい相手であった。デルファは荷物運び人夫たちとの対応に始まる遠征登山隊特有の仕事から、荷物の仕分け、食糧の管理、登攀ルート開拓、荷揚げ、などなど万般にわたる役割を誠実にはたし、高所順応不足で一時的にＣⅡやBCで休養する必要があったが、のち登頂前後に前線に復帰した。チョゴリザは藤平と平井が8月4日初登頂に成功した。次の日デルファは山口、中島とともにＣⅣからカベリ・ピーク（6850m）に初登頂した。

AACKは53年のアンナプルナⅡ遠征では達成できなかったヒマラヤ初登頂の宿願をチョゴリザで初めて成就させた後、次の目標をサルトロ・カンリに定め、59年準備に着手した。許可証の取得に相当の時間を要することが解り、パキスタン政府との交渉を続行しながらアフガニスタン領内にあるヒンドゥークシュ第2の高峰ノシャックの試登とパミール南縁ワハーン回廊の調査をする計画を進め、こちらは60年に実現した。61年にはパキスタン政府との折衝を持続的効果的におこなうための現地駐在交渉役にデルファが選ばれ、かれは院生として取り組んでいた作物学実験を中断して、カラチやラワルピンディに滞在することになった。外務省、カシミール省の担当官たちと頻繁にやり取りして京都の留守本部に連絡、最終的には日本単独の計画では許可取得が極めて困難だが、ラホールのカラコルムクラブとの合同計画に組み変えると道が開けることが解り、半年後に許可証を懐に帰国することができた。

日パ合同サルトロ・カンリ登山隊（四手井綱彦隊長）は1962年6月下旬、サルトロ・カンリ山群東面から流下するピーク36氷河が巨大なシアチェン氷河に合流する地点に前進BCを作った。ピーク36氷河を登り、主峰東南面にルートを開拓して、三つの中継キャンプを建てる。斎藤、高村、バシールの3人が頂上攻撃隊に選ばれて7月23日ＣＶを出発した。深雪のラッセルに予想外の長時間を費やしたため早い目に露営を決断した。翌早暁露営地から登高再開、8時間後についに最高点に到達した。3人は好天のもと、頂上から360度の視野のなかに氷雪に輝く数十の峰々をカメラに収めるなど、至福の滞留1時間半を享受して、山頂をあとにした。

空路で着いたスカルドを出発、インダス河、支流のシャイヨーク河、そのまた支流のサルトロ河に沿って歩き、ビラフォンド氷河を登り、同名の高度5500mの峠を越えてロロフォンド氷河を降って、初めて流程70キロ余のシアチェン氷河流域に入るのである。第1便がスカルドを後にして山麓への旅を開始したのは5月24日、登山が終り最後尾が同地に帰着したのは8月18日だった。5トン強の荷物を約30キロの梱包に分けて170人余の人夫が背負い、氷河の峠を越えて運ぶ大遠征隊であった。隊員を対象としていろんな医学的データを集めた高所医学の研究など話題に不足のない登山であったが、ここではスペースの都合ですべて省略せざるを得ない。とにかく、許可証交付を受けるまでのデルファの献身的努力が実ってできた登山だから、かれが登頂隊員に選ばれ、使命を全うできたことを私たちは何よりの喜びとしている。

二つの遠征隊に参加した数年あと、デルファは川崎佳子さんと結婚し、これから研究者、教育者としての人生が始まった。一男一女の父となり、自ら実験、研究し、学生に教え、妻や子供との家庭を大事にする。登山者デルファの影が薄くなったのはいわば当然の帰結である。デルファは立派な登山者であったこと以外に、農学・作物学の教授として学生の教育に当たり、さらに野外研究者としても立派な業績を残したことは今更いうまでもないであろう。ただ、このことを適切に説明するのは私の能力をはるかに超えることであり、及びもつかない難事であるので、ここには私の知るその一端だけを紹介することしかできない。かれは1993年から97年までAACKの第9代会長を務めた。同会が中国雲南省西北隅の梅里雪山で日中両国隊員を大勢失った事故の直後の時期であり、事後処理にあたる難しい責任ある地位であるが、持ち前の誠実な人柄で力を惜しまず対処に努め、立派に職責を全うしたことは強調しておきたい。

かれは大学院生のときにフィリピン、マニラ南郊にあった国際稲作研究所で研究員として1年半ほど勤務したのを皮切りに、帰国後和歌山県大島の農学部付属亜熱帯植物実験所に助教授として赴任した。その後は文部省の教科書調査官、岡山大学農学部教授を歴任し、1986年京都大学に戻ってきて、東南アジア地域研究センター、アフリカ地域研究センターなど、職場は時期により変わっている。

このあいだに、中南米ではペルー、ボリビア、東南アジアではインドネシア、ミャンマーなどの国々に野外調査の旅に出かけた。南米ではジャガイモとタロイモ、熱帯アジアではサゴヤシなどその土地特有の作物に興味を持ち、そのたびに新たな探求心を刺激され、研究に励んだのである。後年は熱帯アフリカ、とりわけタンザニア、ザンビアなどの各地で固有の作物群の

調査をおこなうとともに、農業生態学という新しい視点に立つ研究に取り組んでいた。今西錦司さん、伊谷純一郎さんなどが切り開いた京大アフリカ学の伝統の継承者の一人と評価できると私は考えている。

京都大学学術出版会から刊行した『アフリカ農業の諸問題』（1998）は共編著で大部のものであるが、定年を機に既刊の小論文やエッセイを編集して作った『旅の記録――山・作物研究・アフリカ』（農耕文化研究振興会、1998）はたいへん読みやすく、著者の人柄と仕事を知るための格好の本であると思うので、この機会に紹介しておきたい。

アフリカでは現地の研究者たちとの交流や行政担当者たちとの折衝と助言、指導などを熱心におこなった。学会からは、日本熱帯農業学会磯永吉賞を受賞、JICA（日本国際協力事業団）から技術協力事業における指導、助言に顕著な功績があったとして理事長表彰を受けている。なお没後、瑞宝小授賞の叙勲を受けた。

高村泰雄さん、親友デルファの人間像をご紹介したいの一念で筆を執らせていただいた。

デルファの霊とこしえに安らかならんことを祈る。

合掌

個人山行

沖縄本島の一等三角点を訪ねて

大槻雅弘

今西錦司博士の登頂数は「1500山のしおり」で記されて、その後の登山を加えて1552山である。この1552山を登ろうと思えば、約60年間、ほぼ日曜日に半分は山登りをしなくてはならない。完登するとなると、大変な数の山行であることが判る。今西先生は登頂数もさることながら、一方、三角点マニアでもあった。中でも一等三角点は974点設置（平成31年4月1日現在）されているが、その内半分近くの439点を登られている。ところが、全国くまなく足跡を残されたが1552山には沖縄の山はない。

その沖縄にも三角点は沢山ある。私も沖縄県には足を踏み入れたことはなかったが、今年6月にその機会を得た。そこで、沖縄の三角点をチェックしてみると1等から4等まで何と780点もある。その内一等三角点は19点があるが、沖縄には高い山はない。一番高くて「与那覇岳」の498mで、離島も含めて500m以上の山はないのだ。

そこで、今回19点のうち沖縄本島に8点ある一等三角点を探訪することにした。伊丹空港から那覇空港を往復して、2泊3日で一等三角点8点全てをタッチするには行動に工夫がいる。まず、時間を最大限利用する。次に、レンタカーも最大限利用。その為に飛行機は初発と最終便を利用する。当然のことながら、事前に三角点設置場所の地図の確認はもとより、立入禁止場所かどうか確認。更に、事前連絡と許可を取りすべて用意万端のうえ京都を出発した。

6月14日

1　須久名山　148m

那覇空港からレンタカーで設置場所のゴルフ場へ向かう。ゴルフ場と約束した時間に到着するため、車中で食事。事前連絡のおかげで受付の対応はいい。三角点設置場所近くのプレーが終わり、5番ホールへカート2台で向かう。降ろされた場所は、広々としたところとは対象的に、三角点はブッシュの方向だ。早速、ブッシュに突入。「ハブ」に注意と言われたが、最初は優しくストックで足元をたたくが猛ブッシュでそれどころではない。汗まみれ、傷まみれ、イバラまたイバラの連続。やっとその先に三角点発見する。【写真1】最初から凄い場所の一等三角点だ。

2　八重巣岳　163m

ゴルフ場を後に、国道331号をカーナビと、地図を見ながら走る。目的地は沖縄に多い陸自基地の横で、立ち入り禁止場所ではない。駐車地点からGPSを見て進むと、少しブッシュを漕いだ崖の上に金属標の三角点を見つける。狭い場所で写真を撮るのにも苦労する狭い場所。下りは大きなアンテナの建つフェンスの横を通り車へ戻る。この日はひめゆりの塔を経て、ホテルで食事。長一日の行動を終えた。

6月15日

3　与那覇岳　498m

今日は沖縄北端の最高峰「与那覇岳」の探訪である。高速道路と国道、林道と走り登山口へ。今回の一等三角点で唯一の登山らしい対象の山である。入口にはいろんな看板と「ハブに注意」と。琉球竹の生い茂る道を約一時間半。三角点は開けた琉球竹に囲まれたところにあった。【写真2】残念ながら展望はない。

4　八重岳　453m

与那覇岳を後に、2番目に高い八重岳の三角点をめざす。地元の人に尋ねると、予定していた道路は通行止とのこと。少し遠回りして、電波塔が多く建つ高台まで舗装道が続いた。三角点は、見晴の良い国土交通省の電波塔の横にあった。

5　妙山　201m

三つ目の三角点は、公園の駐車場から階段を一直線に一気に上った所にあった。そこは小さな広場で、螺旋階段が付いた展望台があり、すこぶる見晴らしの良い場所だった。大展望を楽しんだ。【写真3】

6　弁ヶ岳　165m

本日最後の三角点。車のナビを見ても判りにくい坂の多い複雑な道を、やっとのおもいで目的地の公園の一角に駐車させる。ここでも三角点への登り口に「ハブ注意」。少し草がかぶった道をひと登り。見晴らしの良い高台にあった。夕陽に映える首里城を望む。ホテルに帰り、那覇市内を散策。京都から来たと言う気さくな店長の居酒屋で一杯。ほろ酔い加減でホテルへ帰る。

6月16日

7　平屋敷　71m

3日目。快晴の下、事前に連絡してあった高校へ。日曜日でクラブ活動の生徒と、顧問の先生のみ。三角点は校門のすぐ左の小高い所にあった。設置時には標高からして、おそらく学校も何もない平地であったろうと思う。

8　高離島　121m

今回最後の三角点。かつては離島であった所が「海の駅」を挟み、海中道路で繋がった「宮城島」へむかう。海から一段高いタバコ畑の端の、木々に囲まれたオオムラサキが舞う静かな場所に三角点。その後、観光客に混じって暑い陽射しを浴び、琉球王朝時代の首里城の見学。慌ただしい3日間だったが、充実した三角点探訪の旅を終えて沖縄を後にした。

（追記）

原稿を出した後、10月31日首里城全焼。6月に観た正殿、テレビでの炎を見て言葉なし。沖縄県民の心のよりどころを、一日も早く復元を祈ります。

実施日：令和元年6月13日（木）～15日（土）
参加者：森　榮司、大倉寛治郎、大槻雅弘、能田直子、
　　山﨑泉、竹下節子、他1名

写真1　須久名山　148m

写真2　与那覇岳　498m

写真3　妙山201mからの展望

個人山行

猛暑の「笠ヶ岳」

竹下節子

2019年8月2日（金）～4日（土）

遭対メール、登山届Compass提出。水1日2.0ℓ＋αエネルギーチャージ飲料、500mℓのお湯、ザックを降ろさず飲食出来るよう行動食はウエストポケットへ。効率よく水分補給とエネルギーチャージで猛暑に立ち向かう。昨今の高齢登山の遭難事例に載らなようにしたい。

1日目

朝一番の新穂高ロープウェー行きバスに乗車、昔を懐かしみながらバスに揺られる。

Am7:45新穂高ロープウェーに到着。おみやげ屋さんでドラエモンの時計を買う。時計を忘れた。ドラエモンにこの山旅を助けてもらう。

Am8:15新穂高温泉をスタート、真夏の太陽が照りつける左股林道をわさび平小屋まで約1時間余り歩く。避暑地のはずが異常な暑さだ。僅かな日陰を見つけては水分をとった。想定外に疲れる。わさび平小屋のトマトで元気をもらってオレンジを買って麦茶に塩をひとつまみ入れてと「元気！」の戦略を考ながら進む。

笠新道登山口に着いた。「ここから登るのか？」ひと言、ふた言、言葉を交わしたパーティーがここへ吸い込まれて行った。猛暑の笠新道は耐え難い。ここは下山に使うことにする。わさび平から誘引している水を補充してわさび平小屋へ。リンゴ、トマト、オレンジ、きゅうりが小屋前の一刀彫丸太に浮かんでいた。いつ来ても鮮やかで絵になる光景だ。瑞々しいトマトで喉を潤してオレンジも買って暑さを乗り越える準備をした。とにかく「暑くてたまらん。」登山者とのコミュニケーションも「暑いですねぇー！」だけで済んだ。皆、話すのも辛そう。小池新道分岐より4時間半かけて鏡平小屋に着いた。満員だ。シーズン真只中に合わせて双六小屋が予定の登山者が暑さバテで鏡平小屋になだれ込んだ。私は女性部屋に入れてもらえた。そんな中、遠雷と雨が本降りになった。笠ヶ岳では落雷がありテントが一張り焼けたそうだ。幸い怪我人はなかったようで安堵する。夕飯は「ミンチカツ定食」とミニうどんを頂いた。バッテリーを充電してPm8:00就寝。

2日目

早々と朝食を澄ませ槍穂高が映る鏡池まで散歩した。池畔に描きかけの絵がイーゼルに立てかけてあった。今朝は美しい槍穂が映っているらしい。私は池に映る青い空を期待していたが、物足りなくもそれはなかった。そんな鏡池に満足をしてAm6:00小屋を出発。今日は笠への長丁場だ。鏡平から1時間で弓折分岐、双六方面とここで別れる。振り返れば迫力の槍穂高が見える。素晴らしい景色に休憩中の登山者も幸せそうだ。私は弓折岳へ登って、懐かしの眺望を山座同定、満喫する。そして笠ヶ岳に続く道へ体の向きを変えた。大ノマ乗越まで一気に下ってまた登りになる。辛いが多くの花達に癒された。抜けるような青空が広がり槍穂高は位置を変えてついて来た。暑さは変わらずだが心は軽快そのもの。Am9:20大ノマ岳より秩父沢まで足元注意で降り、登り返して抜戸岳に続く、一羽のアサギマダラが悠々空を行く。抜戸岳分岐「風のひとつでも吹いてくれ。」と叫びたくなるほど暑い。Pm12:20分岐の標柱に寄りかかりランチ、罰ゲームのような熱いカレー拉麺とハーブティーを頂く。そして笠新道分岐、明日はこの道を降る。抜戸岩を降りきると、雲行き怪しく暫しの雨に遭う。すぐにカッパを着たがまもなく止んだ。小屋が見えていて遠く感じるのは辛い。「やれやれ」テント場を通過して小屋前、遅くまで残る雪渓を迂回してPm2:40ようやく小屋に到着。昨日と違って部屋に余裕がある。夕食まで同室の方々と雑談。明日降る笠新道話で散々脅かされた。部屋は「まだ空いているね。」って話していると遅い到着の方で満杯になった。そして夕食にハンバーグカレーを頂いて夕照の笠周辺を散歩した。明日の準備をして就寝。

3日目

Am3:50スタート10分程で笠の頂上に着いた。「涼し

い。」カッパを着て丁度よい気温だった。笠ヶ岳の標柱で自撮り、朝陽に浮かぶ槍穂高のシルエットが美しい。この時ばかりは快晴に感謝する。ご来光を浴びて小屋へ戻り朝食を頂く。Am6:10 出発、今日は夕べ「大変だよ！」って脅かされた激下りの笠新道を降る。分岐までの道は優美な笠ヶ岳が素晴らしく後ろを何度も振り返った。分岐で抜戸の尾根を越え暫くは緩やかな降りで杓子平に至る。振り返ると雄大な笠ヶ岳がまだ見えた。標高を下げる度に気温上昇、暑さに苦しみながら急下降。何度も休憩、水分、行動食を都度補給する。わさび小屋で買ったオレンジをここぞと口にする。甘酸っぱい果汁で効率よくリフレッシュが出来た。「ここは標高 1700M」の看板に来た。あと標高 350m ほどで登山口だ。足は疲労困憊、転倒に注意して更に慎重に歩いた。分岐から 1500m 降った。Pm1:45 笠新道登山口に無事下山。残り新穂高まで歩き、中崎温泉で汗を流して帰路についた。

年々体力の低下は否めない。だが行きたい山は変わらない。いかに登るか？が数年来の課題だ。高齢登山、低レベルでも登り方を工夫すれば登れる。と信じて出来る範囲の自助努力をしてこれからも楽しみたい。高齢登山遭難事例に載らないよう頑張りたい。

笠新道、杓子平より

山頂より穂高連邦

個人山行

日高山脈最高峰「幌尻岳」標高 2052m

竹下節子

2019 年 8 月 20 日（火）～ 8 月 23 日（金）（24 日（土）予備日）

行きたい山をどう行くか？幌尻岳を思い始めて 20 有余年の心残り。年齢的に今年が頑張れる最後だと思った。タイミングが良いことにアルパイン広告にりんゆう観光の幌尻岳ツアーがあった。募集人数 8 名に入れるか心配だが申し込みをした。そして百名山の最難関と言われる幌尻岳へ3度目の挑戦が叶うことになった。1 日 10 時間以上歩けること、過去 3 年間の山行履歴が求められた。結果、参加資格は頂いたが、この猛暑と多忙で運動不足、体力低下が危惧される。空いた時間でジム通い、トレッドミル、クロストレーナー、エアロバイク、ヨガで体力向上に努めた。そして笠ヶ岳縦走、京滋支部の沢登り講習会に参加するなど自分への安心料とした。

20 日は TR、SL と参加者 8 名、計 10 名で「とよぬか山荘」へバスで移動。道中涼しく快適な北海道に本州の猛暑を思い出した。夕方 5 時頃山荘に到着。昔は中学校の校舎だったそうだ。なんとなく懐かしい教室でジンギスカン鍋の夕食、フライパンにラム肉と野菜が山盛り、家庭的な雰囲気で頂いた。就寝までに TL より 3 日間のスケジュールと遡行時の注意事項（衣食住遊知）の説明があり、その通り明日の準備をして、就寝。

1 日目

Am8:00 発のバスだが沢の様子が悪ければ運休。予定は未定でいつでも行動出来るよう待機した。この雨では中止だろうと思ったが定刻に発車した。22km を 1 時間かけて第 2 ゲートに着いた。そして 7.5km を 2 時間 30 分かけて歩き取水口に着く。ここから額平川 2 時間 10 分 4km を遡行して幌尻山荘に至る。沢靴に履き替え いよいよ登山開始、不安と好奇心が交錯する。最近登った先輩に情報を聞くと日照り続きの沢は快適そのもの水量も少なく濡れてもすぐ乾くから遊び感覚だったと言う。最難関と言うほどではないらしい。その情報通りであることを期待するが、この雨ではそうは行かないことを覚悟する。額平川右岸には緊張する箇所があった。ひとつは岩壁へつりが 2 ケ所、少しのスペースに足をおいてトラバース、滑ったら川へドボン。鎖はあるが緊張する。四ノ沢に来て渡渉開始、右岸沿いに簡易の橋がつけてあり途中直角に沢を渡る。

次の緊張は脚立を伸ばしただけの不安定な梯子で岩壁を登るところだ。ロープは垂らしてあるが緊張する。幌尻山荘までの渡渉は13回以上あったと思う。が、沢は意外に短く感じた。Pm2:30幌尻山荘に土砂降りの中到着した。ザックは小屋に持って入れないので苦労する。小屋横の雨除けで仕分けして、沢靴とポールは腰板に引っ掛けザックは所定の場所へ運ぶ。シュラフと最小限の衣料と食料を小屋へ持ち込んだ。食事はTL、SLが大半用意してくださるので有り難い。明日は幌尻岳を目指すが雨の様子で決まる。TLより告げられたのは、明日はスタートを早めて幌尻岳をピストン、その足で糠平山荘まで下山する選択もありとのこと。結果は予定通り山頂を踏んで小屋にもう一泊になった。すべての行動は沢の機嫌で決められた。

2日目

Am5:30小屋をスタート、急登が続き2時間程で視界が広がる。空は半分青く、登山道のお花畑が華やかで目を引いた。それから熊おこし？だったか？植物が根っこごと熊に堀起こされ盛り上がった土塊が幾つもあって驚いた。半分怖い登山道、ここは熊の通り道だった。山様はもちろん美しく、整った三角の山がカール沿いに連なってひと際美しかった。またカールの底に黒い点が見えると熊かと思って皆、目を見はった。でもそれは錯視だった。「残念！」そして占冠コースの分岐を過ぎAm9:30「幌尻岳」山頂に着いた。雲ゆき怪しく、少量の雨にカッパを着てランチをとり下山した。

3日目

昨夕から降り続く雨、TLのジャッジは下山決行。沢の様子をじっと目視して増水予測、小屋番の目利きは信頼できる。（結果は誰にも分からんと言われるが）「今出発すれば大丈夫」とお墨付きが出た。全員揃ってAm5:20スタート、登山道を10分ほど降って沢に出た。水深はザックの下まであった。水流が早いところはTL，SLが体を張ってサポートをして下さり難なく通過。平均の水深は膝あたりだった。増水を危惧して安全な所まで休憩なしで先を急いだ。Am7:50取水口に全員無事到着。ホッとして行動食でエネルギーチャージした。あと7.5kmの林道歩きで登山が終わる。寂しさと嬉しさと達成感が入り混じる林道終点、第2ゲートでバスに乗り帰路についた。

行きたい山へ行く手段にツアーを選んだ。一人では出来ない、得られない安心と心強さを感じた。熟練TLとSLに大満足、小屋番の長老にも大感謝。北海道在住の方々と過ごした3日間の喜びが心に残った。まるで連ドラの「なつぞら」で見た北海道人の暖かさと重なって見えた。私以上の高齢者が頑張っている。行きたい山へ行けるよう出来る範囲でこの熟年者達を見習いたいと思った。

五ノ沢渡渉中

幌尻岳山頂 2052m

個人山行

千畳敷から「空木岳」2864m

竹下節子

9月18日（水）～9月20日（金）

天候が安定する日を待って、行きたい山へ行く。千畳敷から宝剣山荘（泊）→宝剣岳→檜尾岳→東川岳→木曽殿小屋（泊）→空木岳→池山尾根を降りる2泊3日の縦走だ。今回は心強くも師匠Sさんと Nさんが同行して下さることになった。

1日目

菅ノ台のいつものトンカツ屋で名物ソースカツ定食（馬刺つき）\980を頂いて千畳敷へ、1時間で宝剣山荘に着くからホテルでゆっくり珈琲タイム。Pm1:40ガスと小雨の中、八丁坂を登った。Pm2:30「宝剣山荘」へ到着。小屋は人が少なくて快適だった。紅葉の頃は満員になるのだろう。

2日目

朝起きると昨日と打って変わって無風、快晴、秋空と気持ちのよい冷たさを感じる。小屋を出て間もなくAm6:15宝剣岳の案内標識に着く。宝剣岳は2度目だが緊張の岩場だ。中央アルプスの頂上付近は基本的に傾斜度45度越えの岩場だと言う。ここも急峻な岩場の連続だ。過去に死亡事故があったハードな山だ。ここまでロープウェーで簡単に登れるから安易に考えてしまうのか。今日は木曽殿小屋まで約6時間の縦走路を行く。気持ちを切り替えて慎重に行動する。基本は3点支持、鎖も沢山つけてあるので心強い。（昔？こんなに鎖があった？）Am6:30宝剣岳の山頂に着いた。目の前に立ちはだかる剣の先の右を見上げると祠があった。その周りは絶景だ。広がる雲海と緑の千畳敷カールに赤い屋根の千畳敷駅、西には御嶽山の雄姿が聳える。そしてAm7:30極楽平へ降りた。宝剣を越えてホッとする。この先はアップダウンが無さそうに見えるが実はある。縦走路は素晴らしい絶景がついてくるからメンタルはケアーされる。が、その起伏は檜尾岳2728m、大滝山2708m、熊沢岳2778m、東川岳2671m、木曽殿小屋までアップダウンの連続だ。最後の東川岳を一気に降ると木曽殿小屋だ。Pm2:50到着。部屋は大広間で雑魚寝、開放感があって素敵な小屋だ。ザックを部屋に運んでから小屋横のテーブルに集合。今日無事だったこと明日の無事を願ってビールで「乾杯、かんぱーい」Nさんはこのあと、木曽義仲ゆかりの水場まで下って由緒ある「義仲の力水」をゲットしに行った。彼女は全くもってタフだ。まだ余力がある。そうこうしている内に気温がドンと下がって寒くなった。小屋に入って夕ご飯を頂く。メニューは、おでんに炊き込みご飯とお味噌汁、小屋の皆さんと楽しく美味しく頂いた。それから、明日、空木方面へ行く方達に注意事項が伝えられた。第1ピーク、第2ピーク、第3ピークと空木岳の核心部に注意するよう詳細が伝えられた。私は不安だけが心に残った。そして就寝。

3日目

今日は菅ノ台の駐車場まで降る。空木岳に登って池山尾根を降るコースだ。それは想定外の激降りに驚いた。菅ノ台駐車場まで約2014mの標高差であることを

空木岳山頂、バックに御嶽山

空木岳のシルエット

覚悟した。幌尻岳で痛めた不安な右膝にテーピングをして降りに備えた。Am5:50 スタート、いきなり急登が始まる。空木岳は岩の山だ。両手をフリーにして安全に登る。先行者を追い越し追いつかれ、Am7:10 空木岳山頂に到着。昨夜の注意事項で聞いた、3 つのピークの各間にある 100m のアップダウンは知らぬ間に乗り越えたようだ。標高 2864m 空木岳の頂上は 360 度見渡す限りの大展望。歩いてきた風景、その奥の北アルプス槍穂高連峰、南は塩見岳、甲斐駒からずっと奥には富士山が頭を出していた。八ヶ岳連峰、蓼科山など山座同定出来る山々が青空の向こうまで広がっていた。感動の空木岳で 3 人記念撮影。「ここにずっといたい。」って思うくらいの展望台を後にする。そして駒峰ヒュッテをめがけて降り駒石を通るコースを行く。最初は視界を楽しみながら歩いた。駒石は巨大石の積木のオブジェのようで面白かった。空木から 600m ほど降り、よな沢の頭を過ぎると難所が始まる。小地獄、大地獄は崖を降りるイメージに近い。ここも事故が多いらしく一人ずつ鎖を伝って慎重に降りた。マセナギを過ぎて 30 分ほどで池山尾根の水場に着いた。美味しい水で一休み。ここは 1780m 地点、空木から 1000m ほど降った場所だ。まだ先は遠い。整備された笹の道をひたすら歩いた。ようやく半分降りて、あと 1000m 降る。Pm1:30 林道終点の空木岳登山口 1365m 地点に来た。まだあと 500m チョット！師匠の S さんは確認出来る範囲でどんどん先へ進む。N さんは私のスピードに合わせて一緒に歩いてくれた。私の足は疲労困憊だが何とか無事に下山した。Pm2:25 ゴール、菅ノ台の駐車場に着いた。

そして温泉で汗を流して帰途に就いた。ご一緒して頂いてありがとうございました。行きたい山に行けました。お二人に感謝します。

最後に「あぁー長かった。」

機会があれば今度は越百小屋に行きたい。・・・

行事案内

◇山行への参加申込は、例会名、会員番号、氏名、年齢、電話番号等、緊急連絡先および山岳保険の加入・種類など必要事項を記入の上、郵送または FAX で。
◇「★マイカー分乗」の山行は参加者の自家用車利用を予定しています。ご協力をお願いします。
◇思わぬところで遭難事故が発生します。車両保険と同様、また、ご家族のためにも山岳保険の加入は登山者の常識です。会員各位のご理解をお願いいたします。

「日本山岳会京都・滋賀支部新年会」の案内

下記の日程で支部の新年会を開催します。会員、友の会、会友の皆様はお忙しい頃と思いますが、是非、ご参加下さい。配偶者等の出席も歓迎です。出欠の連絡は、1月8日（水）までに同封のハガキ（63円切手を貼付下さい）もしくは下記の担当者までお願いします。
オークションの出品にもご協力をお願いします。

日　　時：2020年1月15日（水）　午後6時30分から
場　　所：南禅寺「順正」
京都市左京区南禅寺草川町60
電話：075-761-2311
会　　費：6000円
申し込み、問い合わせ：
支部事務局
伊原哲士

初詣山行

大津宇佐八幡宮初詣登拝 ～宇佐山 335m 登山

宇佐八幡宮に初詣し安全登山を祈念し、西にそびえる琵琶湖が一望できる宇佐山に登ります。山頂には、2020年度NHK大河ドラマ『麒麟が来る』比叡山焼き討ちの史跡であり、明智光秀が城主であった『宇佐山城跡』があります。

日　　時：2020年1月5日（日）
集　　合：9時30分　近江神宮の楼門前
交通機関：JR湖西線『大津京駅』から徒歩20分
京阪電鉄・坂本線『近江神宮駅』から徒歩9分
帰　　り：『びわ湖大津館』から各駅まで15分
行　　程：近江神宮の楼門前→名水金殿井→磐座御足形→宇佐八幡宮初詣→宇佐山→山城跡展望台→宇佐八幡宮→近江神宮参拝→直会びわ湖大津館→解散
山行の目安：体力＝1　技術＝1
直　　会：ナオライ＝神事の最後に参加者一同で神酒神饌をいただく神事
びわ湖大津館（旧びわこホテル）　開始12時00分　¥3000円
地 形 図：1/25000図「京都東北」
担 当 者：上田闊三郎
申　　込：12月24日（火）までに、FAXまたはメールで担当者まで。

平日例会山行

地蔵山△947.3m～竜ケ岳 新春の愛宕山に詣でて、京都で最も高い一等三角点に登る

日　　時：2020年1月23日（木）
集合場所・時間：参加者に連絡
行　　程：清滝→大杉谷→愛宕神社→愛宕山△890.5→・900→・・917→地蔵山△→滝谷→竜ケ岳・921→愛宕神社社務所前→表参道→清滝
地 形 図：1/25000図「京都西北部」
山行の目安：《体力：3、技術：3》
（体力・技術力は各担当の私感）
《注》軽アイゼン携行
担当者・リーダー：田中昌二郎
申　　込：1月15日（水）までに所定事項記入の葉書、FAXまたはメールで担当者まで。

桟敷ヶ岳△895.9m～飯盛山

日　　時：2020年3月12日（木）
集合場所・時間：参加者に連絡
行　　程：周山街道⇒小野郷⇒大森東町→薬師峠→・811→桟敷ヶ岳→ナベクロ峠→大谷峠→飯盛山・791→大谷峠→大森東町⇒加茂神社⇒小野郷
地 形 図：1/25000図「周山」
山行の目安：《体力：3、技術：3》
《注》念のため軽アイゼン携行
担当者・リーダー：田中昌二郎
申　　込：3月2日（月）までに所定事項記入の葉書、FAXまたはメールで担当者まで。

山歩会例会

長野東山/愛宕山
朝ドラ「スカーレット」の里、信楽の山を歩く。

日　　時：2020 年 3 月 24 日（火）
集合場所：信楽高原鐵道・信楽駅駐車場
集合時間：10 時（京都→草津→貴生川→信楽）
行　　程：信楽駅駐車場→愛宕山西登山口→愛宕山→愛宕山東登山口→長野東山登山口→西尾根肩→長野東山→長野東山登山口→信楽駅駐車場
山行の目安：《体力：2、技術：2》
地 形 図：1/25000 図「信楽」
担　　当：中川　寛
申　　込：3 月 17 日（火）までに所定事項記入の上、FAX またはメールで担当者まで。

スキー例会

藪原スキー場

日　　時：2020 年 2 月 8 日（土）～ 9 日（日）
集合場所・時間：四条大宮嵐電前　2 月 8 日午前 7 時 30 分
担当者・リーダー：山村孝夫
申　　込：2019 年 12 月末までに所定事項記入の葉書、または電話で担当者まで。

五支部合同スキー山行（白山山麓）の案内（石川支部担当）

2019 年度の五支部合同スキー山行を下記の要領にて開催しますのでご案内申し上げます。会員の高齢化などを配慮し、今回は白山山麓の旧中宮スキー場を使用します。山スキーが困難な方も気軽に参加出来ます。

1. 期日：2020 年 2 月 15 日（土）～ 16 日（日）
2. 場所：白山山麓　旧中宮スキー場　上部無名峰
3. 宿舎：〒 920-2324　石川県白山市中宮ヲ -16
吉野谷セミナーハウス
電話：076-256-7246
4. 行程：
2 月 15 日（土）
受付　16:00　宿舎玄関ホール
18:30　夕食懇親会
2 月 16 日（日）
7:00　朝食
8:00　宿舎出発（各自車で登山口へ）
昼食
14:00　下山　解散（宿舎玄関ホールにて解散式）
5. 会費：7,000 円（1 泊 2 食 : 行動日の昼食含む）
＊注（行動日の非常食･飲料は、各自ご用意ください。）
会費は当日受付時に石川支部にお願いします。
6. 申込：
※参加ご希望の方は（氏名・年齢・住所・緊急連絡先・携帯電話・山岳保険）を下記までお願いします。
宿泊予約の連絡の為、1 月 17 日（金）までにお申し込み下さい。よろしくお願いします。

申 込 先：日本山岳会京都・滋賀支部事務局
伊原哲士

スキー山行　越前兜

日　　時：2020 年 2 月 29 日（土）
集合場所：29 日（土）午前 8 時　越前大野または勝山（前泊、直接集合の選択可を予定）
担 当 者：山行リーダー須藤、サブリーダー笠谷
申　　込：2020 年 2 月 15 日（土）までに所定事項記入の上 FAX またはメールで担当者まで。

「未知の山旅シリーズ」（第6回）

日　　時：2020 年 4 月上旬
目的の山域：九州または四国方面
計画の概要：2020 年 1 月中旬に支部ホームページ（スケジュール、山の談話室）へ掲載
計画詳細：参加希望メンバーの希望・人数・体力・技術を踏まえ整合
参加人数増で、複数コース設定も可能。
担 当 者：笠谷　茂
申　　込：2020 年 2 月 15 日（土）までに所定事項記入の上 FAX またはメールで担当者まで。

第36回日本山岳会全国支部懇談会（双石山）の案内（宮崎支部担当）

2020 年度の日本山岳会全国支部懇談会を下記の要領にて開催しますのでご案内申し上げます。

1. 期日：2020年5月16日（土）～17日（日）
2. 場所：宮崎県
3. 宿舎：〒 889-2162　宮崎県宮崎市青島 1-16-1
電話：0985-65-1555
ANA ホリデイ・インリゾート宮崎
4. 行程：
5 月 16 日（土）
13:00　受付開始

15:00　開会式、記念講演会
17:00　入浴
18:30　夕食・懇親会
20:30　二次会
5月17日（日）
7:00　朝食
8:00　登山等に出発（バスで移動）
8:00　宿舎出発（各自車で登山口へ）

Aコース　登山　双石山（ぼろいしやま509m）
ホテルと登山口間はバスで20分。
双石山登山の行動時間は約5時間。15時前後にホテル帰着。解散。

Bコース　日南海岸散策。青島・鵜戸神宮などを散策。
移動はバス利用。15時解散。

Cコース　自由行動。

5. 会費：20,000円（1泊2食：懇親会・17日の弁当・飲み物・バス費用含む）

＊注（行動日の非常食･飲料は、各自ご用意ください。）
会費は当日受付時に宮崎支部にお願いします。

6. 申込

※参加ご希望の方は（氏名・年齢・住所・緊急連絡先・携帯電話・山岳保険）を下記までお願いします。

宿泊予約の連絡の為、1月30日（木）までにお申し込み下さい。よろしくお願いします。

申 込 先：日本山岳会京都・滋賀支部事務局
伊原哲士

会務報告　支部役員会

第403回支部役員会

2019年8月7日（水）18:30～20:00
（於）てんや　出席：18名　欠席：9名

「報　　告」

7月に実施された夏山山行・飯盛山、沢登り講習・奥の深谷、山歩会・三郎ヶ岳、健康登山教室・明王谷、巨木観察・美山名田方面について報告。

支部長・事務局長報告

JAC総会（新会長選出、120周年記念事業等）について報告。

その他

自然保護全国集会、国立登山研修所「安全登山サテライトセミナー」、滋賀県「林業技術研修会」への参加報告。

「計　　画」

8月に実施予定の山行計画について協議・承認。

「そ の 他」

山の日記念「ファミリーハイク@丹波」について及び支部会員名簿作成について協議。

第404回支部役員会

2019年9月4日（水）18:30～19:30
（於）鴨沂会館　出席：18名　欠席：9名

「報　　告」

8月に実施された山の日記念ファミリーハイク@丹波・美女山について報告。

支部長・事務局長報告

個人山行についての登山計画書提出、比良山系での死亡事故、友の会入退会者の報告。

「計　　画」

9月に実施予定の山行計画について協議・承認。

第405回支部役員会

2019年10月2日（水）18:30～20:20
（於）鴨沂会館　出席：21名　欠席：6名

「報　　告」

9月に実施されたお月見山行･守屋山、山歩会例会･岩尾山、巨木観察について報告。

支部長、事務局長報告

全国支部合同会議の内容について報告。比良山系沢登り登山者事故、山での盗難事案、会員名簿の取り扱いについて報告。

「計　　画」

10月に実施予定の山行計画について協議・承認。

「そ の 他」

京都新聞連載「丹波の山々」の年度末までの延長について協議。　（中川　寛記）

═══次号 138 号　予告═══

2020 年 3 月 15 日発行　原稿締切 1 月 31 日（金）
原稿送付先　編集担当　福田文夫

═ あとがき ═

日本も、観光立国を目指して何とか経済の立て直し図ってますが、京都は、外国観光客が増えすぎて、日常生活が送れない高齢者も多く、歩くのも、バスに乗るのも一苦労です。富士山もＴシャツ一枚で、登る外国人がドット押し寄せてきてます。生活文化の違いだけでは、済まされない問題が出てきました。京都の案内板には、英語、中国語、韓国語が溢れかえってます。電車でも、バスでもアナウンス。うっかりすると日本語聞き逃して、乗り越しする日本人もいますね。

もう山で迷子にならずに、街で迷子になる時代。どうしたらいいの？

日本山岳会京都・滋賀支部会報「支部だより137号」

発行所　〒525-0072 草津市笠山3-6-6
松下征文方
日本山岳会京都・滋賀支部
発行者　松　下　征　文
編集者　幣　内　規　男
印　刷　〒603-8148 京都市北区小山西花池町 1-8
（株）土倉事務所
TEL 075-451-4844　FAX 075-441-0436

京都を学ぶ

文化資源を発掘する

京都学研究会 編　各2,200円【以下続刊】

【洛北編】
京都の眠れる「宝」（文化資源）に光を！　北山のヤママユが紡ぐ絹糸、葵が繋ぐ賀茂祭と将軍家など、洛北の自然・歴史・文化を探究する。

【丹波編】
山国・京都丹波を再発見！　平安仏、明智光秀の統治、グンゼと蚕糸業、保津川下りなどなど、山里に刻まれた歴史・文化を掘り起こす。

【南山城編】
京都と奈良を結ぶ回廊地域・南山城。木津川、緑茶、恭仁京、飛鳥仏教、名勝地笠置、流れ橋など、南山城の文化的景観を掘り下げる。

南山城 石仏の里を歩く

木津川に沿って古道を歩き石造物をめぐる

石田正道 著

京都と奈良の狭間で独自の文化を育んできた南山城をめぐる石造物探訪記。　1,800円

山登りは こんなにも面白い

静かなる私の名山を求めて

窪田晋二・檀上俊雄・草川啓三・中西さとこ・横田和雄 著

5人の登山者がそれぞれ山登りの素晴らしさ、楽しさ、面白さを語る静山紀行。　1,800円

空撮ヒマラヤ越え 山座同定

FLYING OVER THE HIMALAYA : Peak Identification

中村保 著

未知の大地ヒマラヤを空から撮影し、高峰群の山々に山座同定を付した、画期的な写真集。　8,000円

ナカニシヤ出版

〒606-8161　京都市左京区一乗寺木ノ本町 15　http://www.nakanishiya.co.jp/

電話 075-723-0111　FAX 075-723-0095

表示は本体価格です。

世界の山旅手がけて50年！【山旅専門の旅行会社】アルパインツアーからのご案内

タスマニア島 オーバランド・トラック大縦走 10日間

出発日～帰着日	旅行代金（東京発着）
2/19（水）～2/28（金）	￥708,000
3/13（金）～3/22（日）	￥708,000

クレイドルマウンテン・レイクセントクレア国立公園の最深部を北から南へ縦断する5泊6日のロングトレイルを貸し切りロッジに泊まり、約65km を踏破します。

▲クレイドルマウンテンを展望する

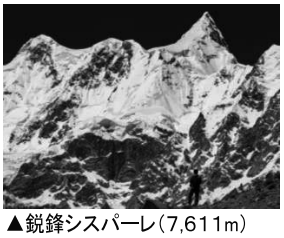
▲タスマニア島の最高峰Mt.オッサ(1,617m)

花咲く桃源郷フンザと グレート・カラコルム展望ハイキング 10日間

出発日～帰着日	旅行代金（大阪発着）
3/27（金）～4/5（日）	￥356,000
4/3（金）～4/12（日）	￥356,000

桃源郷と称されるフンザの春は、杏子や桃の花が咲き誇り、7000m 峰や6000m 峰の雪山に囲まれながら華やかな風景が広がります。

▲グルミット付近からのトポップダン(6,106m)


▲鋭鋒シスパーレ(7,611m)

観光庁長官登録旅行業第490号(第1種)/一般社団法人日本旅行業協会 正会員　ボンド保証会員

アルパインツアーサービス株式会社

大阪　〒550-0003　0120-938-290

大阪市西区京町堀1-4-3（TCF肥後橋ビル2階）